

印象發表

三、練習

教師の體驗發現——曲と歌詞の形式内容の統一美、歌曲に即したる發音、發聲——

音程、樂典の練習

唱謠練習

四、總合的觀賞

唱謠

感想發表

(觀賞の場合)

一、歌曲直觀

印象發表

二、歌曲の研究

分解↓總合

唱謠

三、批評

四、兒童唱謠

溫習會等

### 第九章 手工教材の學習と學習方式

手工科は立體的構成による美の陶冶である。美の陶冶としての構成は内部生活の表現であり、形への創造である。

形への創造とは兒童の藝術活動による教育であり、目的と價值とを内在する。即ち子供の表現を意味するものである。實用的なる物であらうとも、それが兒童の内なる生活の表現であるとき、それを私は手工の學習であると見るものである。彼の大人本位に實用的の立場から實用的物品を製作せしめることには、子供の表現といふ要素は

極めて少いのである。

私とても決して實用的なる立場を否定するのではない。高等小學校の手工科は實用的教材がその多分を占むべきである。しかし造形的表現たる以上は、創造的な活動としての指導でなければならぬのである。即ち創造的な態度に立たしめねばならぬのである。材料の前に解放するも一つの方法であり、環境の整理も大切なる方途であり、創造的な立場に於ての導き創作の助成も必要であると思ふ。即ち發生的作用的立場に立たしめる、かうした立場に於て指導せられたものは、造形藝術としての表現乃至表現物である。それにその表現物は實用的なるものであり、それが同時に藝術的なるものでもある。私の考へるところによれば、より藝術的なるものはより實用的なるものであると思ふのである。

以上述べた様な立場に於て手工教育が行はねばならぬが、その内容には、情緒的な創作と、純藝術的な創造と、科學的な創造とを内容とする立體的表現活動である。その活動の指導が、手工教育であり、手工教材の學習である。

以上に於て手工學習は兒童の内からの形の創造、形の表現であることを述べた。それは内なる感性と印象とによつて、即ち直觀によつて、兒童の表現といふ具體的、活動、有形的活動として立體的なる構成をなすものである。

それ故心の中に美を産み出すことが必要である。それは美を心の中に培ふことである。それが創作、即表現によつて美を把握することとなるものである。美を産み出し美の表現をなすことは、手工表現の中に自己の生命を見出すことであり、所謂創造的立場に立つことである。かうした立體的表現は主觀の表現であるから、興味を益々盛にし、創作活動をいよ／＼力強くするものである。

かく考へ來たれば心の中に産み出されない、單なる製作の教育、即ち器物を作り構成する教育は、主觀の表現でもないし、生命的でないものである。只だ實用物を造り表面的なそして形式的なる活動、學習が行はれるものであつて、深い情緒的な、發展的な創作力の學習とはならない。

それにはより藝術作品を翫賞することに由立することも必要なことであり、藝術作

品に對する講話も必要なることである。より實用的なるものはより藝術的であるが、藝術的ならざる、從て實用的でない。即ち情緒的ならざる實用品をコックと造るだけに終つてはならない。かうした大きな力をして美眼を心の中に植込み、そうした生活の中に産れる表現でなければならぬ。

又實際製作活動の場合に於ても、自己の多分に含まれた態度をもつての表現である様に指導して行くことである。その結果自省せしめ、自力の内驗となり、人間性への教養となるものである。

しかし私の立場に於て人間性への教育は、即ち職業的教育となるものである。これ藝術的陶冶は實用的陶冶に關聯するものであるからである。私のいふ手工學習は美の陶冶である。方法としては創作的なる立場に立たしめ、この心の表現であることを述べた。所謂精神科學的方法による學習であるべきである。次ぎに私の學習形式を掲げることとする。

### 一、内面直觀

對象の觀照

形態の空間的想定

### 二、創作

自己の空間的表現（美的法則の體現——形態の空間的推定）

### 三、鑑賞

批評 美の確認

## 第十章 體操教材の學習と學習方式

體操教材の學習とは、體操遊戯競技の學習のことをいつておくこととする。廣く體育的生活の指導として考へられるときには、課外運動、自由運動、夏季體育施設、校外遠足會等として課せられるいろいろの體育施設として指導せられることをも含んでゐる。體操遊戯競技は所謂その體育運動と、身體の組織活動についての認識的な方面

とが相關聯して身體的發展をはかることである。

私のいふ身體的方面的發展といふことは、心身の發展を意味してゐるのである。心身の發展は生活の發展であり、生活の發展は人格的關聯を有する、生命生活の躍進を意味してゐる。

かく人格的關聯を有する生命の發展は、價值體驗たる生命の發展を意味するものであり、生理的解剖的な生命、即ち肉體的な生命は流動發展的な根源的の生命に全體的大關聯を有するものである。

生活の躍進乃至は發展といふことが、人格的關聯を有することに於て、生活關聯を有することであり、生活關聯を有することに於て、道德的生活價值、藝術的生活價值、經濟的生活價值と關聯するものである。彼の單なる肉體的の生命は根源的の生命を自然概念によつて説明科學の方法によつて捕捉したるものであつて、眞の生命の片影であるにすぎないのである。

### 理想的なる發達育成指導

私は全心意の活動に關聯する活動としての身體發育を主眼とするものであることを述べたのである。即ち私の考へるところでは、均齊なる體格、良好なる體質、旺盛なる體力の陶冶は全心意の活動と相即相關によつて發達陶冶せらるべきものであると信ずる。

いふところの理想的なる發達育成に於ける陶冶の目標とは何か、それを次ぎに分析的に掲げることとする。

#### 精神的方面陶冶目標

##### 一、注意力の養成

注意力活動の程度は、知能の判定になる。體育運動殊に遊戲競技に於ては、注意能力の増進に效果あるものである。

##### 二、判斷力の養成

活潑なる判斷力を養ふに好機が多い。即ち競技の如き之れである。

##### 三、思考力と想像力の養成。養はれる機會が多い。

- 四、規律、協同、剛毅の精神養成。共に生活に必要な精神力である。
- 五、快活、果斷、正義、公平の精神陶冶。個人的にも社會的にも必要なことである。

#### 身體的方面陶冶目標

- 一、均齊なる體格。解剖學上均齊なる體格を作らねばならぬ。即ち身體各部分の發達が均合つて姿勢が正しくなければならぬ。
- 二、良好なる體質、生理學上から見て良好なる體質にと改造せねばならぬ。即ち内臟諸器關と筋肉骨格がよく、均齊的に發育し、然かも其の機能を完全にせねばならぬ。
- 三、旺盛なる體力。活動上體力を旺盛にする事が必要である。即ち活動し得る身體的勢力を旺盛にせねばならぬ。持久力とか、機敏力、巧緻力の練習をすることによつてである。

勿論相關的なる發達を目途するものであるから、形式本位によるものであつて、精

神活動の伴はない形式體操や、技術本位なもので技術上達をのみ目標とする所謂技術體操や、無自覺、無自省なもので兒童を靜的受働的一齊的の立場に於て行ふところの無自覺體操をさけるものである。そして生理解剖學上のみ立つ生理解剖體操、或は舊獨逸式な精神振興主義の體操にも賛意を表し得ない。

次ぎに理想的なる發達育成を陶冶目標とする體操の内容は如何なるものであるべきかを示すこととする。

- 一、身體の機能力と健康と營養變化亢進上に價值大なるもの、そして大なる方法。
- 二、大筋群の運動を多くなさしめる方法。
- 三、軀幹の發育に即する運動と方法。
- 四、興味中心。
- 五、行動の訓練に注意。
- 六、意識的自發的の全的活動。
- 七、衛生的要素の補助。

## 八、教室學習時への態度指導。

## 九、運動享樂的態度指導。

體操學習、體操教育として一單元に指導せられる一般的な則序とか過程を考へて見るならば、第一は體操その教科の本質を考へて、それと、一般的な立場での兒童の心理、生理、解剖の上から來る諸條件とに依據して組織せられねばならぬものと思ふ。勿論かうして組織構成せられた形式は、全くの形式的なるものであり、普遍的なるもので、論理的なるものである。次ぎに掲げる形式もそうしたものである。然しその形式論理は生命的な論理であり、生命を内在するものである。かうした形式の形式としては、誘導と、練成と、整理とを考へるものである。その形式の形式内には、運動の多種類を含むことや(解剖的立場)、その運動相互の有機的なる作用の關聯を有すること、或は運動の強弱、難易が發達的と考察せられること、(生理的立場)兒童心理に合致すること(心理的立場)等が考へられて内容づけられねばならぬのである。

こゝに注意すべきは、教練の指導とか競技の指導とか遊戯の指導とか別種の各指導

形式を以てすべきではない。小學校に於ては教育の本質から考へても、兒童の心身發達の上から考へても一つの形式の内に教練、體操、競技遊戯の何れかを中心として先行して配合するは必要ではあるが、一單元の中には各々の教材が全部内含する様に配合せねばならぬのである。

## 一、誘導

運動自習——遊戯競技體操の個別或は協同自由運動

## 二、練成

生理的段階(體操遊戯競技教練共に)による運動——一齊、個別

自由運動——個別、協同

## 三、整理

整理運動

前述したる學習形式によつて、實際指導の具體案を立て、いよく指導するにあつて注意を要する問題の二三について述べやうと思ふ。先づ兒童の身體的な個性の上

に指導することである。即ち劃一であつてはならぬ。一體今日の小學校に於ける身體検査は更に更に正確でなければならぬと思ふ。種々細部に亘つて各部分の検査をなすことは、勿論結構ではあるが、その前に正確なる注意に依てなされることが必要である。即ち正確なる現在に立つべきことである。そして一年に一度でなくて回数を多くし、その移行の状態を記録して行くことである。かうした現状の上に相當運動をなさしめるとして教材と方法との考慮を要すると思ふ。

次に運動は極めて自然的であるべきである。餘りに強い運動のみや、困難なる運動のみを排列して調和を失はぬやうにすることである。調和を失ふことは正常なる發達をなさしめないのみか反つて病的な状態へと導いて行くと思ふ。相當なる變化を與へることは疲勞を少なくし運動の正確度をも減少するものである。相當なる變化とは器具使用をなすとか、姿勢に變化を與へること等である。

最初に述べた様な身體個性の上に立つて行ふ場合、必然的に自覺的になるものであるが、更らに其の際、其の學習時の主眼とする教材について指示してかゝることもよいと思ふ。

いと思ふし、又練習に伴つて簡易なる學理の要領を説述して行くこともよいと思ふ。

## 第六編 學習指導の諸方式

學習は生活を價值化することであり、生活経験をより高き統一に構成する處の生活の充實であり、生活の發展である。かかる學習を私は生活學習といふのである。そしてよりよく生活學習をなさしめるために指導を必要とするものである。

私が今迄述べたことは、何れの教科學習にも討論學習、相互學習なり、問答學習或は問題學習であつて、學習の形式を求めるといふことが、よりよい學習の指導法でないことが明瞭になつたこと、思ふ。尙又學習の形式に於ける順序としても、獨自學習に始まり、相互共同の學習を経て、獨自の學習に終るとか、獨自學習から相互學習に終り、相互學習から獨自學習に終るといふ順序を一定して、之に限るとも定めることの餘りに形式的な方法に流れると思ふのである。それは討議學習や或は問答學習を期待することもよい。主たるところは教材の如何によるものである。教材の本質に

考へて、適當なる材料は無理にせずとも、極めて自然的にそうして自發的發動的の態度をとり、創造的な形式をとらしめるのがよい。それが如何なる教材であるか等のことは既に述べたところである。

要するに極めて自然的であることである。自然的であることは即ち教材の本質に合致することである。形式的に陥らぬことである。それでこそ生活の擴充深化の指導であり、生活の發展のための生活學習であると言ひ得る。

次ぎには學習生活指導の形式についてであるが、先づ第一に遊戯的學習である。兒童の發達に相即して彼等が遊戯的な生活を生活する時期、即ち主として尋一、二年の學習の指導形式が遊戯的學習である。やがて發達して目的と努力とを内含する生活を經驗する尋五六年時代以上の學習は、作業的な學習であることである。前者は遊戯としての生活學習の形式であり、後者は作業としての生活學習である。この二つの學習の中間には遊戯より作業への過度期の生活學習がなければならぬ。それは遊戯的作業の學習であると言ひ得る。



## 第一章 遊戲的學習と作業的學習

### 第一節 遊戲的學習

遊戲は兒童の本能的な生命の慾求より起る自由なる、自然的な兒童生活で、未發達な生活時代に於ける全我的活動の生活である。

即ち遊戲が彼等に對する直接經驗の様式であり、實生活の様式であり、體驗生活の様式である。而して斯る遊戲の生活それ自體その儘が學習である。故にかゝる時代の生活指導の様式は兒童の遊戲生活それ自體を指導することゝ課程作業を遊戲化して行く學習の遊戲時代を以て生活指導の様式とする。自發的な遊戲の指導は生活の價値化であり、特殊の普遍化である。學習の遊戲化は價値の生活化であり、普遍の特殊化であるが何れも遊戲そのものを中心とする生活指導の様式である。

そこで唯遊戲學習といつた處で、單なる大人の考へた學習の爲めの所謂巧利的な打

算的な遊戲を考へて徒らに概念化されたものであつてはならぬ。兒童の本能生活に即した自然的遊戲の形式及び精神を捕へたものでなければならぬ。彼等が朝から寢るまでの活動は目的意識があつてする動作では決してない。無目的な本能活動である。それをそのまま生活させる中に自らなる統制を形造り、以て生活を價値にまで進めるのである。

雜然の中に育まれる陶冶である。

### 第二節 作業的學習

作業は目的を意識し努力的に生活を體驗する生活様式で精神的活動の結合したる自己活動による體驗生活である。學校生活に於ける作業の生活は個人と學級との關係により個人的作業と共同的作業の様式を生ずる。個人的作業は兒童各自がそれ〴〵目的を意識してこれを實現する生活の様式であり、共同作業は學級に於ける共同の目的を協力して實現する生活の様式である。而して作業を中心とする生活指導の様式は自發

的なる行動直觀を個人的に共同的に指導する直觀行動の學習と、學習を個人的に共同的に行動化作業化する學習の作業化とを以て生活指導の様式とする。而して作業生活の指導過程は

- 1 作業目的を明瞭に意識し
  - 2 目的實現に必要な方法を考察し
  - 3 目的事實を實現し
  - 4 生活全體を自省する
- 四要素を含む。

遊戲的學習は生活の未分化時代に指導せられる形式なるが故に、綜合的、統一的な生活形式に於ての形象であるが、作業的學習は生活の分化したる時期の指導形式である。初めの總合的體驗に於ては價值は總合的に分化するが、次第に價值それ自體の本質に向つて進展して行く。かく價值それ自體の本質に向つての生活は勿論知情意合一の全人的生活であり、そして生活の本質に即しての具體的の活動をする。かゝる生活

の體驗形式とは、知的生活は理會の形式により、道德的生活は、實踐の形式によることであり、藝術的生活は鑑賞の形式、宗教的生活は信仰の形式、政治的生活は協同の形式、經濟的生活は勞作の形式によることとなるのである。

又學習の形式として總合的學習と分化的學習とが考へられる。總合的學習は未分化的なる全體として學習する形式であつて、又分化的なる生活材を綜合的に生活學習せしめる形式である。かうした生活學習の形式は尋一、二年に於て主として用ひられる形式であり、尙學年が進んだ場合に於ても綜合的なる生活によつてのみ理解せられる學習に用ひられるのである。

分化的學習は生活の展開して來た時、即ち學年が上級に進んだ時にとる形式である勿論知情意の合一したる全人的の生活ではあるが、文化價值の本質に即して分化的なる形式をとるものである。

## 第二章 總合的學習と分化的學習

## 第一節 總合的學習

兒童の生活は總合的、全體的たる點に其の特色を有する。即ち形式上より見れば、知情意が合一的に統一的に活動する分割な深然たる生活をなし、内容上より形式と關聯してすべての價值を全體的に總合的に體驗する。總合的生活の指導は分割なき混沌たる生活そのまゝを生活せしむることによつて自然的に全體として生活を擴充深化し全人としての生活を發展せしむる所謂合科非分科の學習と、分化したる生活體驗を全體的に總合的に生活せしむる生活の鑑賞理解を以て生活指導の様式とする。

## 第二節 分析的學習

分割なき總合的なる生活の擴充深化は生命の欲求の方向、即ち生活態度によつて種々の生活を分化して行く。こゝに各教科の學習の形式を生ずる。即ち生命欲求と生活の態度とその向ふ對象とに依て價值それ自體を中心とする各教科の生活が展開する。

かくて生活は一層深化擴充されてより高き統一をなす。分化的生活の指導は分化せる生活それ自體の本質に従つて指導の様式を異にする。即ち文化價值體驗の形式を以て指導の原理とせねばならぬ。

文化價值體驗の形式には何れも體驗の方法たる認識、體驗、了解の見方を含んで居る全一的活動である。吾々は直前に述べたる如く、かうした體驗の形式によつて生活を指導しなければならぬのである。言ふ處の文化價值體驗の形式とは如何なるものであるか、即ち次の如く規定さるるのである。

知的生活——認識理會

道德的生活——修養實踐

藝術的生活——鑑賞創作

宗教的生活——敬虔信仰

政治的生活——自治協同

經濟的生活——勤儉勞作

次に學習には個人的の學習即ち獨自的の學習と共同的の學習の形式がある。個人的學習は自由個別の學習の進行相であり、自發に學習する時に、又は課題によつて學習をなす時にとる形である。共同的の學習は學級で共同的に兒童相互が學習したり、教師又は兒童の説明を聽講して行く學習相である。

二つの學習の何れに偏することも、即ち一を中心にするとはよくない。第一教化財乃至教科の内容本質を考へて、その何れかをとるべきである。又兒童の發達にも考へねばならぬのである。

個人的學習と共同的學習との組合せについては前述の通り、機械的に一定の型を定むべきではなく、學習効果の省察の上に立つは勿論なれども、教化財乃至教科の内容によつて變化せしめて行くべきものであると思ふ。

### 第三章 個人的學習と共同的學習

#### 第一節 個人的學習

自發的にその自己活動によつて、個性的に自己の生活を經驗することで、學校生活に於ける個人的生活の方面では最も重要視すべき事實である。つまり獨自的に遊戯又は作業の生活をなすことで、純然たる遊び又は自學自習の生活である。

かゝる個人的生活は自由に生活を生活せしむる自由學習と問題又は課題による生活の個別的指導とを生活指導の様式として立てたものである。自律的自學自習の態度が完成されてその研究方向や方法等の目安が立て得られたなら兒童教育としての目的が達せられたものといはなければならぬ。

#### 第二節 共同的學習

學校生活の大部は共同的な生活である。即ち共同遊戯、共同作業によつてその生活を體驗する事實にして社會的なものである。

個人としての人間の一般的生活様式を基礎として、學校生活に發展するものである。而して共同學習は兒童相互を中心として同一の生活を認識了解する學級學習と教師又は兒童の説明による認識了解を中心とする聽講學習を以て其の内容とするものである。人間生活は共存共榮である。教育は人間を造ることである故に共同の上に生活する訓練が出來てゐなければ、教育は完全されたものとはいひ得ないのである。

## 第七編 學年教科指導

教科が客觀的原理（社會の進化）と主觀的原理（個人の發達）との交響關聯の上に分化と未分化に即して、分科と未分科とを生ずるのであつて、其の關聯組織の案について大觀した私は、更に其の教科の分化と統一の各學年にわたつて、内容的に述べて見たいと思ふ。是れ未分科、分化に即した未分科、分科の教課内容を明かにすることは、其の學年の教育内容、即教育組織を明かにすることになるからである。先づ尋一の教科内容から始めることとする。

### 第一章 尋一の教科指導

兒童發達の未分化状態にある時期に於ては、教科も未分科でなければならぬ。それ

を客觀的に考へて、社會的發達をのみ考へ、分化した諸種の形式によつて指導せんとすることは良くない。それは分化發達に即せぬものである。

是れ社會の發達によつて分化して來た學術の専門的乃至は部門の知的分化を其のまゝに、兒童の生活に移し課さんとするものであることは、明瞭なことである。

尋一の兒童は遊戯としての全一的の活動生活をする。それが未分化の姿の生活である。即ち遊戯としての未分化の生活の中には、實物の直觀もあり、算ふることもあり、讀むこともあり、話すこともあり、聽きたがる生活もある。書く、描く、をどる生活もある。想像が働き、創造と模倣もある所謂渾一の生活々動として現れる。

それがやがて發達分化することによつて、遊戯、仕事、作業といふ區別を生ずるに至るのである。此の未分化生活に即しての未分科から、分化した生活に即しての分科活動に立脚して、之れに關聯せる材料を統整彙類して教化材とする處に教科目が生ずるのである。

其の分科による教科目の分化と統一なるものが、妥當なりや否やは社會文化と個人

發展との關聯分化に關係するものであることは、再三述べたところであるが、其の關係の正しきに相即して妥當なることがわかると思ふのである。

彼等兒童の自然的な遊戯の生活を組織的に系統的に教育的に指導して行かうとして遊戯の活動生活々を見るならば、物語の形式の生活と、藝術的な遊戯と、算へるといふ數といふものを基調とする生活と、體育的な遊戯との四つに分相して考へられる。

此の四分相に即して行く、是れ彼等の要求し、希求する生活々動の單位として行はれて居るのである。其故に其の一つの相は立派な教材であり、教科の内容をなす單位となるのである。其の單位を指導して行くことが、教育の姿である。勿論この四分相は分科せられたものでなくて、全體としての方向性に命名したる分科分相である。

さて物語の生活相としての内容として、教化財を以て統整彙類し、教科の一科として組織するのであるが、是れ最も自然的のものである。子供が話し合ふ、話したがる喜んで聽く、話を要求する。その生活に即して、物語、傳説、神話、童話等を以て組織するのである。そして彼等の道德性を培養して行く。

又其の物語の中に生活内に起る問題をも取扱つて生活を指導して行く様にする。此の立場に於て最も問題となるは適切なる材料の選擇についてである。先づ小川未明、島崎藤村、北原白秋、西條八十氏等の作から選ぶのがよい。

藝術的な遊びを内容とする教化財としては、童謡、童話、物語、神話、傳説等を中心として、假名文字を授ける様にし、自由表現（綴方）と文字の書き方、歌ひ踊る、自由な遊び、自然觀察等の生活を組織する。生活形式としては、本、雜誌を讀む、自由を書く、幾度も繰り返へして見る。集りとまねごと、遊び道具を作る、花園を造る魚を捕り魚を飼ふ、砂遊びをする、人形作製をする、カードを作る。

觀察したことは話して見る、繪畫としてかいて見る、其の觀察方面は、四季折々の自然界の現象乃至は自然物で、兒童の生活にある材料を主題とすることである。例へば春は植物の生育を見ること、夏は種々の草花を集めしめ、秋は虫を集め、冬は兔、小鳥の如きを飼育せしめる等である。

文字の習得を 國語的生活としての遊戯 主としたる

カ ア ○ し 字	ナ プ の り ひ	活 リ 字 と ろ	出 出 送 と ひ	シ ○ の 字 送 り	初號活字 木版 ゴム版 明禁水にて白紙に書いてアプリ出させる。 一同圓形を作りオ玉の中へ毬を入れ次の人 に引渡しながら○の字のついた語を發明 (見)する。 カナカードの中から語を見つけてならべて 見る。 五十音をならべて見る。 厚紙に水にて字を書き砂をかぶせる。 厚紙の字をきりぬく。	字に親ま せる 同 語の發見 單語の發 見
あ か 送 り	て る 字	ぬ き 字	た り	あ か 送 り	お互ひが背に字を書いてあてる。 一列圓形の兒童がカードを順次發聲しながら 送る。	

數的な遊びは自然觀察や其他の遊びの中に啓いて行く、子供の生活の中には、數を基調とするものが随分ある。即ち走る場合、飛ぶ場合、集める場合、投げる場合、書く場合、まねる場合等皆數量的な生活が行はれるものであるから、かゝる生活から材料を統整して行くのである。次に體驗學校で指導せられた數的生活としての遊戲を引用する。尤も次の數的遊戲は、數計算生活の方面を主にしたものであるから、他に數量生活の方面の遊戲生活の指導のあることを忘れてはならぬ。

數的生活としての遊戲

名稱	方法の概要	主眼點
物集	石花葉等	同種類を發見する
まり入れ	二組にして競争	かぞへ方が主、數の大小比較
わなげ	數百枚のカード作製(數字記入可)	かぞへ方
出席しらべ		
缺席しらべ		
カードひろひ		

鈴打	教師又は兒童がうつ粘土にて	耳による數へ方
おだんご作り	カード使用	かぞへ方 又は加減の練習
やりとり遊び	BA、ジャンケンにて ひ合ふ	數よみの練習 加へる事の練習
數圖サイコロ	一から六まで 又は五より十までの圖式記入	字と數との聯合 數の大小 數へ方 加減の練習
數字サイコロ	○から五まで記入	數の大小比較 加算練習 數の大小比較 加へて十になる事の練習 加算練習
數とり競争	二組を作り教師用カードにて	暗算の速達
メクラ板	個人競争 黒板上のクツを引く	
親類遊び	2・4・3を親類としこの二數を多く組ましめる	
數とりこま	8・6・7を親類としこの二數を多く組ましめる	
玉入れ數び	玉が數字のある凹所に入ればよい	
數ひろひ	カード使用によつて持参すべき數の明示 練習によつて五と十をぬいて	



数つり遊び	釣のあるカードを竿にてつる	興味と計算
累加	— 5	
累減	— 3	
	自發的計算のしかた	

體育的な遊びとしては、自由遊戯、散歩、遠足、舞踊等が組織せられることである。

## 第二章 尋二の教科指導

尋二の生活は尋一生活の延長である。而してそれが格段の發展を示して居るといふのではなくて、只だ發展への過程としての一段階をなして居るといふにすぎない。見ても大した間違ひはない。即ち彼等の生活が、それ程分化して來ない。渾一的總合的な生活を現出して居る。かゝる生活をなす兒童に分化した教科を、そして其の教科が客觀的な立場から系統立てられた内容を組織統整彙類したところで、生活内容の指導とはならない。

従つて教化材としては不適切である。然らば妥當なる教科内容とは如何なるものかについて述べようと思ふのである。

先づ物語科の教化材は如何なるものか、それは作家の代表作から現實的なものを探る様にすることである。兒童によつて或は教師によつては、一口噺的なものや落し話的なものを探る等があるが、それは良くない。意味を内容に含む内面的なもので、教育的な内容を含むものであることである。例へば日本童話寶玉集、世界童話大系、童話の日本史(吉田氏)、童話讀本(菊池氏)、幼ものがたり、幼きものへ、ふるさと(島崎氏)、小川未明氏の童話、北原白秋氏の童話、西條八十氏の物などから集めて置くがよい。

次は遊戯科の内容についてである。國定教科書及び他の童話、童話、神話、傳説、物語を通して生活が陶冶せられる。續き物の讀物に興味を持つて來て、讀むことの趣味が少々出て來る。それをばづさない様にするのである。且つ文字も必要に應じて教授してやることである。國定教科書だけでも漢字が百七十三字があり、それに平假名

四十八字がある。讀むことによつて、内容の意味の推知理解し得る程度のものであつて欲しい。その材料が讀むことを指導するものであるからである。讀むことは生活の陶冶となるものである。

それから讀むことに即して生活の自由なる表現をなさしめる。そして遊びの生活や其の日の學習状態を書かしめる、それが日記の初步である。又綴方への過程としての藝術的生活に於ては、思想を豊富にすることが大切である。即ち内容生活を生活せしめることによつて自由表現へ導く、それから實際生活の内容をかゝせることにつとめる様にする。

書く方面に於ては、硬筆書方として獨立して行ふことになる。形式的な文句を書くことだけが目的でなくて、生活の中に面白いとかいふ内容を伴ふもので、面白いといふことに連れて書く様に導く。一方には基本練習として硬筆書方練習帖の如きものを使用して、正確に書くことの練習をなさしめる。

音樂の教材は、文部省尋常小學唱歌、小松梁田葛原氏の大正少年唱歌及大正幼年唱

歌、田村氏幼年唱歌、小松氏作曲集、目黒の大正幼年唱歌、吉村氏の新作唱歌、弘田氏童謡曲譜集、中山晋平氏の童謡小曲、梁田氏歌曲集、本居氏の新作童謡、子供達の歌、コドモ社の童謡曲集、弘田氏の少女小曲集等から材料を採るがよい。

歌詞は兒童の想像生活や、現實生活をはなれたもの、兒童の言語と交渉の少ないものはよくない。歌曲に於てもそうで兒童のメロデーであり、ロマンチックなものであることである。それは思想と曲想との合致したものであることが自然的である。音樂と表情運動との連絡、音樂とダンスとの連絡によつて、表情、態度、姿勢、發表力等を精練して行くこともやつて行く。

圖畫は自然を教師として描かしめる。形式的な型の様な指導をするよりは、自然的な描寫の内に自然的な指導をして行く位でよい。そして大膽な表現をなさしめることが第一であるし、環境を多様にして各々自己の行動を中心として表現せしめることがよいのである。

手技的の遊びに於ては、材料を與へて自由に製作させたり、或る物を定めて製作さ

せたりするのである。自然観察は野外へ出ることを本質としたい。自然現象にふれしめることによつて、名稱や、生態を取扱ふ様にする。又池中の虫類や、小鳥、兎、金魚、龜、かたつむり等の飼育や花草雜草の栽培に注意して來るに従つて教室内や花壇校庭等にてそれが栽培飼育をやらせる。

事實生活として數量的な生活をなさしめる。そして子供としての事實生活の中に數量の發展を考へることである。例へば種々なる商ひごつこ等の類の生活の中に勘定の練習、價格、名稱、販賣の道德等が遊戲としての組織から生活せしめられる。其の數量名稱として目方、長さ、金錢等が使用練習せられることとなる。又友達との遊戯たる走力のレコードなどからも得られる。

主として加減である。其の内容は、具體的なるもので、具體的整理をして行く、そして具體的概念への導きとなる。乗除の初步も取扱はれ、量的、具體的なグラフの初步も課せられることである。

體育的遊戯としては、自由な遊び、自然的な遊戯と、五十米走法などを指導してや

ることである。

## 第二章 尋三の教科指導

尋三の程度になると心意構造の發達に即して文化環境を分化的態度によつて考へる様になる。それが證據には、分科的の研究態度を現はして來る。それ故に教科も相即的に分化して定められねばならぬこととなり、其の分化せられた教科の内容も分化せられて考へられて來るのである。此處に注意すべきは、分化と内容への深化とは、相關的に行くものであることであり、分化と發達とは同義内容のことである。

修身的の生活教化材は、生活がやゝ理知的になる傾向があるため、童謠、神話、童話だけでは、彼等は承知しなくなる。そして生活に對する現實方面を考へて來るために現實材料であることである。

それから徳目的ではなくて、生活の中から教訓材料を得て行くことである。日常生

活事の道德的訓練をして行くことである。

次には國語科の生活指導材について述べようと思ふ。國語そのまゝは文學ではないことは肯定する。國語には文學財と所謂科學財とがある。即ち讀方財には文學財と科學財のあることをもつて見る立場をとるものである。而して國語といふ以上は、當然のことではないかと思ふ。又國語そのまゝを文學と見ることも誤りではない。そうも見られないことはない。國語を文學と見る立場をとる者は、讀方を文學でなければならぬといふ。それで讀方は國語の内に包含されるものであると言ふのである。是れ科學的文化財を教化財としてとり、之れを兒童の發達心理に即して文學的記述法により其の内容を體驗せしめんとする。その人生表現は、すべて文學であると廣義に解して居るのである。要するに讀方として課せられる其の讀方財は文學ではないが、其の讀方を國語として言はれる時の國語は文學ではないかといふのである。

さて私は、教材の本質觀と兒童心意構造の發達との上に願慮して、國語生活の指導をして行きたい。私は材料として國定教科書以外に、兒童文學としての童話を多く取

扱つて行きたい。一體國語の教科書の方には、文體として尋一、二に崇敬體のみであつたものに、常體と文語體とが加へられて來る。語彙の擴張は大切であつて、生活體驗による多讀と聽方によつて養はれるに至るものであるから直前に述べた、童話、物語、童謡、神話、傳説等の提供と聽方の系統的指導をなすことである。本學年に於ては、國語科を讀方、綴方、書方と三要素を未分科としての一科と見て居る。

綴方は創作であると言つても過言ではあるまいと思ふ。形式内容としては、自由なる表現をなさしめる。そして日記の書方の指導もする。創作の裏は鑑賞である。鑑賞の指導を怠つてはならぬことも明かなことである。

書方に於て毛筆書方は本學年から始めて課するがよい。其の始期は基本形を練習し直ちに尋二の國定教科書を採用して差支へないのである。私の實驗によれば、尋一から毛筆を課したものと、尋三から始めて毛筆を課したものと、二學期に至つて同様の成績程度まで進むものであることの記録を持つて居る。

硬筆書方の材料は教科書からの新出文字、片假名、平假名を以てするのであるが、

それは尋二と同様に生活を書くものである事である。即ち生活の内容を伴ふものである事である。

音楽の材料は尋二とほぼ同様な作歌作曲家の曲歌集から採る。そして上手な子供の獨唱や教師の獨唱などを鑑賞せしめるし、樂器使用練習を始め、文字視唱法もはじめる。

手工圖畫が尋一、二に於て藝術的な遊戯として學習生活せしものが、本學年から作業科として分科する。そしてそれが作業的色彩を以て課せられる様になることである。

私は此處に二つの問題について私の立場を述べねばならぬことになつた。即ち(一)教科としての作業科と作業化との關係相違について。(二)藝術であり、藝術的であるべき圖畫手工科を作業科として作業化したることの意味についてである。

此の二問題は必然的に關聯して居る問題内容を有するのである。それは其の理で圖畫手工を何故に作業化、従つて實用化したるかの疑問を何人も起されることと思ふし

且つは私自身としても此の意味の説明をしたい考へからである。

さて此の問題は私の生活指導の組織から起つて居るのである。即ち私の立場に於ては、尋一、二は遊戯生活の指導期であり、尋五、六が作業生活の指導期である。其の中間なる尋三、四は遊戯から作業への過程生活の指導期であり、遊戯的作業の生活期である。而して私は圖畫手工を具體的の作業、藝術的の作業と考へて、具體的のものを作ることによつて、心の直接的なる生活を指導しようとしての考へから、作業科と命名したものであつて、藝術の體驗要素を體現して居るのであるから、直前に述べた一、二の問題もそれで自然的解明せられることである。

圖畫の學習材料として靜物寫生を加ふるに於ては、形象の創作的表現を重視し、對象の中から美を見出して表現創造せしめる。材料はクレヨンからパステルに移り、精密描寫にはペン鉛筆を加へるもよい。

數學習用具を教室に蒐集して置く。そして實驗實測による數生活をなさしめ、數量的經濟的經驗の表現をなさしめ、假設問題を取扱つたり、作問の指導をしたり、個別

指導に努め、數量生活の趣味を持たせる様にする。一般的に形式算に於ては、同一問題のそれを數回にわたつて反覆練習して行く、それには指導法に於て計算方法を次第に進化させて行くがよい。應用としては、事實關係の知識と事實との關係から算法の適用を判断せしめて行く。次に教科書題材の作業的取扱例を示すこととする。

尋三教科書に表はれたる題材の取扱ひの二方法

題材	指導内容	生活資料
長さ(米)	一、作業的取扱 イ、任意の單位による長さの測定 ロ、その一單位としての米單位による測定 1、本張面等身邊に存するものの實測 (正しき測定の訓練をなしつつ) 2、學用品其他教室内のものの實測 (身長、指等も……) 3、運動場、學校園、體操用具等による問題構成	イ、紐、棒、幾何的圖形、線…… ロ、實測用度量衡器 三十糶物差(各兒) 二米標竿 十本 三十米卷尺 五ヶ 十米卷尺 五ヶ 幾何形證 數十種 其他新聞紙 ハガキ……

目方(瓦)	容(立)
4、解放されたる實測による問題構成 二、遊戯的取扱 中飛、高飛、徒歩……のレコードの實測等 一、作業的取扱 實測 筋測 (長さの場合と同様) 一、作業的取扱 實測 目測…… 注意 構成された問題、解決等の過程に於て無理がなく次に記する加減乗除等の形式算を授けることが出来る。	及貨幣等日常生活に表はれるもの多數 ハ、歩測用の器具其他…… 臺秤 二ヶ 上秤 五ヶ 皿秤 二十本 目方の明瞭なる實物…… 長さの場合と同様なるもの 立 六ヶ 十 十二ヶ 十 十二ヶ パケツ、ヤカン、水槽…… 液體、穀物(豆類)砂…… ビール瓶 サイダー瓶 正宗瓶 タラヒ

題材	指導内容	注意事項	生活資料
加法の筆算形式	イ、各桁とも繰上らぬ場合 ロ、同前 二數の和 三數の和 ハ、空位○を含む場合 ニ、十進諸等數の加法	△目的づけると度量衡 金錢等と關係づける △交換、分配、結合等	一、賣買に關するもの紙幣、學用品 二、gr kg cm mm l

<p>減法の筆算形式</p>	<p>ホ、一桁上る場合 (一)        ヘ、同 (二)        ト、二桁上る場合 (三位数)        チ、同 (二位数)</p> <p>二桁の加法に含まる、心理        (一)位置に関する學習        (二)結果の記憶        (三)視数と心数との加法        (四)空位を見ずして        (五)〇を見ずして        (六)二位數に基數を足すことの學習        (七)上位に上るものを除いた結果を書くこと</p> <p>一、減々法と補加法 其他        イ、基數を掛け繰上らぬ場合        ロ、被乘數に空位あるもの        ハ、一位繰上る場合        ニ、新位出来る場合        ホ、缺位なき二位數をかける場合        ヘ、同 三 同        ト、缺位ある三位數をかける場合        チ、被乘數が基數なる場合</p>
<p>乗法の筆算形式</p>	<p>の法則の暗示的な取扱ひ        (題材の選擇による)</p> <p>△實際問題よりノト作業へ、黑板上作業へ        △心理的過程に留意しての取扱ひ        △事實問題に表はれたる形式算        △事實問題を補足としての形式算教授        △形式事實融合の取扱ひ</p> <p>△イ、ロ、ハ位までは最初教師が主として兒童の前にて事實問題を構成して形式算へとすむ</p> <p>dl等に関する度量衡器及實測用の事物        三、其他廣い意味に於ける數量生活資料        四、時に關するもの時計</p> <p>圖示計算への道を開く        平面、立體等空間的方向への道を開く</p>

<p>イ、各位割りきるもの        ロ、被除數に空位ある場合        ハ、一位だけ割りきれぬ場合        ニ、基數で割り最後に剩餘ある場合        ホ、商が空位となる場合        ヘ、二位數にて割切れる場合        ト、二位數で割り残りある場合        チ、二位數で割り商に空位ある場合        リ、三位數で割る場合        ス、短除法</p>	<p>數量生活の伸展に關する長さ(直線的取扱ひ)の有難味を考へつゝ進んで行きたい。</p>
---	---

次に生活科と私のいふのは、國語教材の内容とする財の方面内容ではない。此の段階にある兒童の多面的な生活の各分相の一つの生活を指導すべく命名した教科名である。未分化即ち未分科の生活相の指導相であることである。生活觀照の上に——自然と文化社會の生活事實から豊富なる材料をとることである。分科的に見れば、地理國史理科への分化をなすべき未分化生活の指導であることである。材料は自然界と文化社會に於ける生活環象から直接事實を觀照させることと、言語文章を通して指導して

やるのである。

體操科に於ては遊戯、競技初步、體操を分科したるも、未分化を基調とする分科なるが故に、分化關聯を有するものであることである。其故に獨立的に行ふことは、生活に合致しないために、子供は生活から掛け離れた強制的なる形式に當てはめられることとなる。初歩的の競技は極、簡易なる走法から始め、遊戯は個人的活動を多くなすものであることである。

#### 第四章 尋四の教科指導

尋四になると生活がやゝ分化せられて來る。ために教科も必然的に分科せられて來る。それで直前にも述べた様に分化は生活の深化を意味し、開展を意味することである。然し其の生活は分化の過程としての段階をなして居ることを忘れてはならぬ。而して其の生活段階の上に、材料の統整を考へて行かねばならぬことである。

修身科は此の程度に至れば、修身科として考へてもよい。修身科として考へることは、道德の徳目的取扱をしてもよいといふことである。然しそれは勿論具體的な生活の上に立つての徳目的の取扱ひをしてもよいといふ意味であつて、決して形式的抽象的の道德の徳目取扱であつてはならぬことである。

國語科に位置を占めて來た書方は、其の内容に於て技能的、技術的の分子が多く、文學より獨立せしめる方が一層相互に、教科の使命を完うする上によいと思ふ。勿論書方とても創作的なる心理要素を多分に含んでは居る。思想感情の表現傳達の具象、美の觀賞と創造としての再體驗にあるのであるが、それが技能的であることによつて讀方(文學)と綴方(創作)と獨立すべきものであると思はれる。それが兒童心理發達から見て、乃至は書方財の關聯分化過程から考へて、本學年から獨立せしめるがよいと思はれる。書方には毛筆硬筆を併課して行く、共に内容を伴つた形式材の基本練習であり、實際生活材の練習でありたいものである。

而して國語科には讀方と綴方とを存在せしめる。讀方には、現教科書以外に多數の



讀方體驗をなさしめることが必要である。記號即ち文字言語文章の實力を、どしく補充して行く。そして能力の習練をなして行くことに即して一層多讀せしめて行く、多讀することは、彼等兒童の生活經驗を豊富にすることになる。即ち知識とか思想とか感情とかが豊富になり、精神生活は深められて行くことゝなるものである。

其の方法として、培養として多讀せしめるための多くの資料を與へて行くことが必要である。それは文學的教材即ち神話、童話、傳説、童謠、物語等の兒童文學からとるのである。

音樂科の材料は、尋二の處に述べた作物から選んで課することである。譜は本譜から入つて行く、簡單なるものから順に進めばさしたることもない。聲樂方面では詩人作曲家によつて作られたる作歌作曲を歌はしめ、氣分を害はず、正確に歌へる様に指導する。それには自分の氣分を尊重する様にすることである。彈奏、蓄音器、上手な兒童の獨唱等の鑑賞をさせる。

生活科に於ては生活内容の進むに従つて材料も進んで考へられることは、當然のこ

とである。郷土に於ける自然や、文化の内面的研究をなさしめる。即ち生活體驗をさして行くことである。是れが地理科とも理科ともなり、そして今迄に出て來た國史の材料を系統立て、見る。それが國史科に發展して行くのであり、其の系統を立てるのに讀物を課するが最もよいと思ふ。即ち日本お伽噺・巖谷小波、標準日本お伽文庫・森林太郎氏外三氏、古事記物語上下・鈴木三重吉氏、小學神話讀本・山崎博、渡邊旻氏、小學お伽選・奥野庄太郎氏、少年日本讀本・荻野由之氏、童話の日本史・吉田助治氏、日本歴史畫譚・上田萬年氏解説などがよい。

理科に於ては博物材料と日常理化的材料とを兒童生活に即して有機的に取材することである。

圖書手工は作業の生活期に入つては生活味得の美術であり、人生表現の藝術作業であつて、共に藝術的ではあるが、分科として其の本質にふれた指導をせられねばならぬ。共に人生表現の藝術作業である關係上實用的要素も含んで居るから、所謂實用的立場といはれる部面（實用圖案、自由圖案の如き）も指導せられる。是れ指導の目的

方向に於て、陶冶財の内容に於てある。

學習、描寫の材料は大體尋三と同じ範圍でよい。一體兒童は實物と比較的沒交渉であつたものが、忠實に實在と比較して描くに至るものである。指導上内面生命を表現せしめることを重んじて行く、手工科に於ては、彼等の遊び道具とか、自分等の使用する用具など、兒童の直接的な生活から生活に應用したものを選んで行くことである。

女子に裁縫科が分科して課せられることになる。美の表現であり、美の觀賞であり即ち一つの藝術的作業であるが、其の要素には生活に即した實用的立場が含まれて居ることを忘れてはならぬ。是れやがて美術實用の生活教科に發展して行くものである。

兒童數學に於ける小數・分數の教授には、親切な説明も必要であるが、量として實驗實測によつて進めて行く作業の機會を自由にしたり、機會を多くしたりする。又記録への導きと概測練習もする。具體的量的經驗を想像力に訴へ、原理形式に表はさして見たりすることも必要である。

尋四になつても體操科の運動内容は分れて、獨立的に指導されることは、生活の興味をそぐものであるから分化關聯的に行はれることを要する。競技としては短距離、中距離の競走や、走幅跳、發足法などを練習したりする。

## 第五章 尋五の教科指導

修身科の内容は、日本人の生活を理解せしめるにある。系統としては修身書を忘れてはならぬ。修身書によつて道德の徳目的取扱をなすべきである。そこで最も必要なるは教師の誤りなき徳目觀の必要なることである。そしてそれが生きた實感を持つて居るものであれば最上である。

勅語・詔書は明治天皇の御聖旨であるばかりでなく、日本人道德の眞の姿を體驗せしめる財であるから、其の趣旨の徹底をはからねばならぬ。

又兒童の道德的生活、そして兒童の道德的行爲の指導としての思想的な取扱——創

作讀物により、歴史談により、新聞記事によつて生活の發展につとめることが仕事である。

國語科は本學年に於ては、讀方科(文學)綴方科(創作)に分科し、書方と三分科に分化獨立するに至る。讀方科に於て言語、文字、文章の教授、文學の教育として見た時、彼の國定教科書の不満は補充として文學材料を以てする。それは國語教育の本質的な目的に即した眞の文學的生命價值あり、國語的價值あるものを選択することである。即ち現代文學の傑作、國民文學の秀篇等を選んで行くことである。

綴方に於ては何といつても創作と鑑賞の指導である。創作することは個性の進展となり、鑑賞の指導は、社會性の深化充實となるものである。而してそれは文話も必要であり、自作も大いにやらせ、手紙とかお嘶、對話劇なども作らせて見る。

書方には毛筆と硬筆とを相半ばして行きたい。毛筆書方に於ける文字の書方は個性美の表現であることは勿論のこと、硬筆自身個性美の表現も可能であるし、それが日常生活その物が毛筆と硬筆とは共に用ひられて居ることに起因するのである。是れ一

種の美術であると同時に社會生活に連絡して書くことや、書く態度、筋肉練習が行はれる。材料は童謠、詩歌、自己創作文、既習の漢字等から選ばれたものであることである。

音樂科に於ける材料は、文部省編小學唱歌集、開盛館の教育唱歌集、統合女學唱歌文部省尋常小學唱歌、高等小學唱歌、北村季雄氏の中等音樂教科書、永井田中共編の女子音樂教科書、吉丸氏新體唱歌、中田島田兩氏の中學唱歌、音樂學校の中等唱歌、山田源一郎氏の女學唱歌、コドモ社の童謠曲集、白眉出版社の子供達の歌、赤い鳥社の赤い鳥童謠集、本居長世氏の新作童謠、中山晋平氏の童謠小曲、金の星社の童謠集弘田龍太郎氏童謠曲譜集、少女小曲集、梁田貞氏の歌曲集などから採ることとする。

地理科は教科書を系統の中心として學習を進めて行く、そして其の學習は生活を中心とする総合的な見方がよい。それには大單元の練習をとることである。兒童參考書を参考のために擧げる事も無益ではあるまいと思はれる。

鐵道旅行案内、年鑑の二三種(時事、朝日、毎日、報知)、趣味の地理・白井島田共著、

地理學習・齋藤英夫、日本の誇・北垣恭次郎、少年少女常識叢書・文洋社發行、趣味の小學地理・及川泰治、兒童のラヂオ・西田與四郎、お伽旅行・藤原淡水等がある。

國史の學習も教科書を參考として國史の大系を組織して行く、現在の教科書を取扱ふに當り、精神史觀、民衆史、經濟史觀を一層加味して行かねばならぬと思ふ。教科書編纂者も適當な敷衍と附説とを實際教授の場合に要求せられて居る。

之れを補ふ材料としては、選擇した讀物の適當なるものを與へることである。即ち古事記物語上下・鈴木三重吉、少年日本讀本・荻野由之、兒童源平盛衰記・奥野庄太郎國史美談・北垣恭次郎、趣味の小學國史・桂田金造、少國民の日本史・友納養徳、假名の日本書紀・植松安、國民日本歴史・高橋俊乘、童話の日本史・吉田助治、小學國史附圖・菊池勝之助等がよい。

理科に於ける日常の理化的現象よりの題材は、研究方面を兒童と教師との共選によるのである。それは教師の指導意識が働くことに即して兒童自身が問題を選定するのである。教科書は題材と學習内容の系統化に使用して行くものであつて、學習は日常

生活と交響する文化社會に生活する兒童の題材觀を育成しつつ、理科學習生活を指導して行くこととなるのである。

生理衛生は自己の身體經驗を中心として、有機的に研究して行かせることが必要である。次に兒童の理科學習に於ける參考書を二三擧げることとする。之れは尋常六年にも通ずるものである。

子供の聞きたがる話 原田三夫、最新知識子供の科學叢書 原田三夫、兒童疑問理科智囊 堀七藏、自然界の話 吉田弘・芳澤喜久、學習資料百科全書 東洋圖書株式合資會社、なせですか 小林巳都子、兒童文庫 盛林堂、少年少女常識叢書 文洋社 美的輕妙なる描寫表現をなさしめ、そして主觀的な藝術創造の力と藝術鑑賞の力を發展せしめることが圖畫科學習の仕事である。材料は油繪具や木炭もよい、クレオン、パステル、水彩勿論自由に使はせる。題材としては風景、植物、器物、石膏、圖案、設計圖等を描かしめる。

手工科に於ては木、竹、金工等の材料を以て藝術的の表現をなさしめる作業である

が、其の工作表現せられることは、兒童の學習生活の中からとつて行きたい。即ち自分の學習用具の製作、作業園内使用器具、遊び道具、理科實驗用具などから選擇して決定することである。そして表現のための鑑賞と（藝術家の逸話、美術工藝品の材料品）工具使用法を知ることによる創作をなさしめるのである。

裁縫材料は家庭の生活や兒童の生活の中から選んで行く。そして製作させるだけでなく材料によつて經濟的の認識を與へて行くのである。——洗濯、精選、利用、保存等の知識。

數學科の指導にて小數の割算、求積、諸等數の材料については、社會環境や家庭職業、郷土産業乃至經濟機關から材料をとることが必要である。即ち其の生活の中に指導して行く。事實探索や調査をさせたり、作業の指導をしたり、自力計算による練習や解決をさせる。

問題解決の計算には、數回反覆練習する習慣をつけて行く、そして其の計算法を進化發展さして行くことが必要である。

尋五以上の體操科は分科的にやる方がよくなつて来る。各々の方法について興味を感じて来るからである。此の心理生活を基礎とし、一方には調和的の發達といふことを忘れず指導して行くべきである。

## 第六章 尋六の教科指導

修身科、私は尋常五年の處でも述べた様に、教科書は國民生活を理解せしめる系統としての便りとし、個性的色彩、郷土色彩のある創作、傳記、新聞記事等を取り、自己生活の反省思索をなさしめることによつて、生活の理解と發展とを期するがよい。忘るべからざることとして國民作法の體驗がある。吾々は教養なき國民たらしめない様に言語動作の上に習慣にまでの指導を要することである。

讀方に於ては國語的價值——文學的本質的目的に基いて、文學的教材を補充して行く。詩歌、小説、戯曲等に關する國民文學や現代文學の傑作、名篇や世界文學の名作

の文學的生命ある物を以て、現國定教科書を補つて行くことである。

綴方の創作方面に於ては個別的創作的表現の衝動に基づき、喜びの中に力を發展せしめる。それには觀賞の教育と思索體驗の生活を深化せしめることに努めることである。即ち觀察力、洞察力、直覺力、想像力を培養する。

書方にては、毛筆と硬筆とを併課して行く。やはり一方には書方手本や、硬筆書方練習帖を以てし、他方には材料を與へて、名文書簡の書寫や、自己創作文の清書、詩歌の書寫などをやらせて指導する。

音樂生活の指導に於ては、聲樂の陶冶に半分を費し、其他の半分時をば、鑑賞力の養成と器樂の練習をやらせる。又音樂家の逸話などもやらせる。歌曲の選擇については、尋常五年の處であげたものゝ中から、何度歌つてもあきないもので、兒童の生活にびつたり合致して然かも上品なるものであることである。

地理科、内國誌と新領土と世界との關係は、日本の位置を理解せしめるといふ立場からである。参考書としては、及川泰治著の趣味の小學地理、齋藤英夫著の地理學習

や、文部省地理附圖、開盛館模範日本及世界地圖とを使用せしめるがよい。

國史料に於ても先づ教科書を中心として、其の物足りない點は、補充材料を選擇して、是れが萬全を期するがよいと思ふ。國史の教科書を見るに、兒童本位であり、代表的人物を課題としたること、皇室と國民との關係力説等に於て特色を有するも、廣い意味の文化史方面に缺けて居ると思ふ。

一體國史が、國民生活史の體驗であるならば、國民生活の全野にわたる史的體驗であらねばならぬ。此の意味に於て國史教科書には少々の不滿の感を起さざるを得ない即ち國民文化に關係ある直接材料を加味して行くべきである。参考讀物としては、童話の日本史・吉田助治、少年日露戰爭・巖谷小波、少年國史辭典・守屋貫秀、國史美談・北垣恭次郎、趣味の小學國史・桂田金造、國民日本歴史・高橋俊乘、歴史研究書・仲原善忠、少國民の日本史・友納養徳、小學國史物語・菊池勝之助、大久保馨、學級文庫・ネルソン社等がある。

理科に於ての學習指導上、尋常五年のそれと異なるところは無い。日常の理化的現

象を自力的に研究せしめる助成であるから、題材はやはり日常の文化社會の中から共通して行く様にするのである。其の題材の組織は理科書に求めて行くことである。

手工科は材料を自由に選擇させて、自由な製作をやらせることを本體として指導して行くことである。勿論其の製作に對しては、個性に即した指導意識を働かして行くことが條件である。自由な材料も生活に即したものであることである。即ち遊び道具とか、贈答用品とか、實用器械とかの如きそれである。

圖畫科の材料、題材等は尋五と同じでよいと思ふ。學習生活上に於ては、描寫上の個性を現出し、印象表現をなすに至るものであるから、之れに即して指導して行く。

裁縫科に於ては、家族、友達、自己等の生活中にある衣類、學用品を造らせたり、修理させたり、裝飾させたりする。それから材料に關する知識、洗濯、保存、使用、利用等の經濟的認識を與へるのである。

數學科の生活指導は兒童の生活の中に指導して行くことは、教師の指導意識と兒童の發展創造意識との統合である。算術學習に於ける自力學習もそれである。

分數、比例、歩合、利息等の教化財については勿論のこと、文化社會、郷土の經濟系統、家庭職業等の生活から發展せしめる。其の生活指導に於ては、十分實際材料を調査し、準備して説明觀察により理解せしめる必要がある。

體操科は改正體操要目によつて身體各部の調和的發達をはかつて行く、不均齊なることは健康體ではない。身體個性(身體構造)の調査をしてやつたり、之れに適する個人運動の指導をしてやりたい。且つ尙、學校體操、學校運動を學校内だけでの運動に終らせたくない。

## 第七章 教科の本質價值

私は本章に於ては、教科の本質を考察し、それが小學校教科とする所以の目的を見たいと思ふのである。

教科本質とは教科の目的價值であつて、其の教科に固有の價值、所謂本質的價值の

ことであり、其の教科の個性價のことであり、其の教科の存立し得る所以の生命價値である。小學校の教科とする所以の目的は、小學教育の教科組織に於ける個性價のことであり、教科使命のことである。以下各教科について述べることにするが、先づ修身科から始める次第である。

### 修身科

修身科は文化價値の一方面たる道德價値を有して居る教科である。即ち道德價値を内含し道德價値を體驗することに修身固有の價値があるのである。

道德價値を體驗することは、兒童の精神に道德を構成せしめることであり、兒童に道德的の生活を生活せしめることであるのである。然るに小學校の低學年兒童は、意識的に道德的生活をなすことはないが、高學年に至るに従つて、漸く意識的に道德的の目的實現に努力する生活が増加して來ることは事實である。其故に生活に道德的價値を感受せしめることによつて、道德的生活への基礎乃至過程としての道德的生活

をなさしめることにあると思ふのである。

道德的價値を教育的見地に於て見るときは、(修身科としての)其の個性價として

道德的知識を授與し得ること——實質的價値

道德的情操を涵養し得ること——

形式的價値

道德的意志を陶冶し得ること——

次に小學校に於ける修身科とする所以の目的は、要するに次の如く考へられる。

一、道德的の生活を指導生活せしめることによつて、道德を生活内に創造せしめること

二、生活指導によつて實行力を體驗せしめること

三、自省の生活、體驗の生活によつて、眞の個人、國家、社會、人生の意味を理解せしめること

### 國語科



國語科は主要價值として言語的價值を有するものである。即ち人間相互間乃至民俗相互間に於ける結合を促し、民族及び個人の發達を助長するものであるから、思想感情氣分の交通たる理解又は、發表の價值を有する教科である。それが國民的特有的思想感情氣分を表はすものであり。それが國民精神を養ふ特殊唯一の道であるから、國語的價值といつてもよいと思ふ。

而して一面的に實質的價值として知識、道德、宗教、審美、政治、經濟の價值を有するものである。

一體に國語は國民生活であるともいひ得るものである。是れ國民的生活は、國語的生活にあると言ふも過言ではない。即ち國語は國民精神を體認せしめる唯一の機關であり、個人を國民化する最重要なる要素要件であるからである。而して國語の體系は次の如くである。

身振り發聲によ  
るもの  
聽く生活  
讀む生活  
鑑賞、收得

體験的生活

話す生活  
文字によるもの  
書く生活  
創作、表現  
綴る生活

要するに國語教育なるものは、國民的精神を内容として、兒童の精神發達を期圖するものであることである。そして其の方途として實質的材料（科學、道德、藝術、宗教、政治、經濟）を國語てふ手段的符號によつて陶冶することである。次に小學校に於ける讀方、書方、綴方の本質價值を一瞥することとする。

◇小學校に於ける讀方の本質價值

- 一、讀解力向上のための言語文字の收得
- 二、思想の攝取と魂の觀照

◇小學校に於ける書方の本質價值

- 一、文字の認識
- 二、美の觀賞と創造

◇小學校に於ける綴方の本質價值

- 一、自體の内面生活擴充——生活觀照
- 二、表現能の純化

外國語科

外國語の價值も國語の價值も國語の價值と異なるところは無い。即ち言語的價值（主要的價值）と實質的價值（副次的價值）とを有することである。

そしてそれが外國人の思想感情乃至文化を理解することによつて自國の文化創造に資し、自己を乃至は自國の文化を表現することによつて自國文化の創造傳達となり、其の交錯することは、國家的の交通價值となるものである。

算術科

算術は數量に關する認識を體現（數量理解）することに個性價を有するものであり、

實際的價值としては、他の科學研究に資する處にあるものである。

次に算術の教育的な價值を考察することとする。

- 一、數量に關する認識
- 二、生活上必須なる具象的數量の理解
- 三、計算技能の體得價值
- 四、思考を精密確實にする價值

地理科

地理は自然界人事界の諸現象を地球中心的に研究する科學である。自然現象たる天文地文地質博物人類等を地球中心に研究するは自然地理學にして、人文現象たる政治經濟、社會風俗、習慣、宗教、道德等を地球中心に研究するは人文地理學である。

其故に地理學の内容には、物理學、化學、天文學、氣象學、博物學、經濟學、社會學、政治學等の各學科の知識を基礎として居るが、是等科學の綜合蒐集ではなくて、

立派な獨立的生命を有する科學である。即ち自然的自然現象の空間的分布と其の原因的諸原則を研究する點に於て差を有するのである。

記載的羅列的の説明乃至叙述より比較對照考證による系統的有機的に地と人との關係を因果的、相互的の聯絡を求め、攻究説明するところに地理學の文化價值がある。小學校の教科としての地理は地理的に祖國の現在を體驗せしめることによつて愛國心の喚起をなすにあると思ふ。即ち地理科の價值としては次の如くなる。

- 一、地球、地球表面に起る主なる自然現象の考察
- 二、人文現象の地理的基礎の理解
- 三、自國及世界の政治的經濟的現狀の理解
- 四、祖國愛の喚起

## 國史科

所謂歴史學に於ける歴史の價值は、過去文化を記述することによつて、民族的、國

家的或は、人類生活の實相を明かにするにある。

又歴史は道德的教訓を與へ、美的享樂と美的判斷（文學美術工藝等によつて）を養ふところの道德的價值、藝術的價值や科學的價值をも有するものである。

小學校の教科としては國史科であらねばならぬ。是れ歴史の國民的體驗であり、國民發達の內的關聯を知らしめる即ち國民理想、國民、社會、時代、權力、文化の傾向等の歴史的個性を了解せしめる教科であることによつてである。而して教育的價值としては、

- 一、自國の國家社會の展開を明かにすることによる國民生活と國體の主要の理解
- 二、自國の精華を明かにすることによる國民的志操の體驗

## 理科

理科は自然物及び自然現象に關する知識を體現し、自然、人體を自然科學として或は物理學的、化學的、博物學的、生理學的に説明し、其の認識が人生に貢獻をなすと

ころに、本質價値を有するのである。

而して一概に自然科学的な知識價値をのみ目途目標として居るのではなく、一般的全般的な人格の陶冶價値を根基に考へねばならぬ。それは即ち「自然に對する愛」に於ける目的々統一である。此の自然愛、目的々統一は深められて宗教的價値を體現するものである。

小學校の教科としての理科の價値は、凡そ次の四者になると思ふのである。

- 一、自然物、自然現象に關する知識、即ち博物系統、物理的現象、化學的現象、人體及び生物進化の理法に關する理科的認識
- 二、理科的認識と人生鑑賞との關係理解
- 三、審美心、宗教心、親自然の心の啓發
- 四、研究力、觀察力の習練

## 圖畫科

圖畫科は形態を描く事によつて自己の思想感情を他に傳へ、是れが觀照する事によつて他の思想感情を感受する價値を有するものである。かゝる思想理解の價値を有することは、彼の言語が思想理解の價値を有するのと同様の個性價を有すると考へて差支へない。

尙ほ圖畫科には工藝の進歩發達に資する實用的の價値と、表現形式と表現内容との一致が實感の沈降によつて、美を現する美的の價値と、其の内容が道德を現する道德的の價値とを體現することもあるものである。其の教育的價値としては、

- 一、思想感情の交換をなさしめる生活指導
- 二、形象と色彩とに關する美感の陶冶
- 三、觀察と鑑賞を促し、描寫と考案を堪能ならしめる價値
- 四、觀察力(眼の鍛鍊)と想像力と創作衝動(心の鍛鍊)の陶冶

## 手工科

手工科の價値は圖書科の價値の如く、平面藝術と立體藝術との立場が異なるのみにして、根本的精神に於ては異なるところがないものであるが、内容的に更に考察することとする。

手工科が具體的活動に思想を體現することに、根本的價値を有することは、具體的活動の要素と目的と努力の意識と、自然的の要素と自發活動の要素とを一元的に内含して居ることを意味するのである。

思想を具體的に體現することは、精神の本質と文化、社會との條件を一致全一させるもので、内容的には理論的、道德的、宗教的、政治的、經濟的に生活を創造せしめることである。

即ち筋肉運動の練習訓練は、実行力の強烈と確實さとを進めるものであることによつて道德的陶冶としての價値を有して居り、科學を具體的に體現せしめるところの科學的陶冶の價値と、立體藝術を表現するところの藝術的價値を有し、經濟的な認識と勤儉勞作の鍛鍊を内含する經濟的價値を有するものである。

教育的には次の目的が含まれて居ると思ふ。即ち、

- 一、具體的なる生活の生活指導がなされる
- 二、鑑賞創作、勤儉勞作、身體的活動、道德實踐、生産技能の生活指導
- 三、眼の修練、心の練磨（記憶、想像、思考）手の筋肉鍛鍊

### 唱歌科

一體音樂共者は動物にも共通である。人情風俗習慣、道德意識の如何等に制約せられずして、形式的なる音の階調は美を表現するものであるから、「種族の言語」ともいはれるのである。感情發表の言語であり、藝術の中で、最も普遍的價値を有するものである。それで又それが、人間の本質的要求であるから勿論唱歌科も感情の陶冶を本質とするのである。即ちそれは藝術的な感情陶冶である。

又それに伴つて道德的、宗教的の感情陶冶、時には科學的感情的陶冶を内含するものがある。是れ唱歌に道德的内容を有するもの、宗教的内容を有するもの、又は科學

的興味を刺戟するものの體現それである。

音樂は形式的藝術であつて、形式的要素音聲そのもの、メロデー其のもの、ハーモニ―其のものから、内容的の效果影響を惹起するものであつて、歌詞の有無には餘り關しないものである。歌詞そのものから、實質的陶冶のあり得ることはある。——即ち實質的材料に依存することはあるが、要は形式的な藝術であるところに（曲全體の氣分から來る感情陶冶）特質を有するのである。

音聲藝術の基礎教科としての唱歌科の教育的價值としては、次の如きことが考へられる。

- 一、良き模範に従つて歌ふことによる感情鍛鍊
- 二、靜かに鑑賞することによる感情の陶冶（藝術的、宗教的、道德的、科學的）
- 三、音を聽き分ける能力の發達（聽覺、聽神經の發達）

### 體操遊技科

體操科には體育的認識と身體的の活動とを體現し、身體が身體その物として理想的なる發達育成をなされることを意味して居るのである。

身體の理想的なる發達育成とは、人格的關聯を有する生命、生活の躍進に相即することである。それにはその生活關聯としての體育的生活の主體（身體）は、健康なること、強壯の程度に達すること、身體を目的の支配下に置き得る一般的熟練、身體美を理想とするものである。

生活關聯を有することに於て、道德的生活價值、藝術的生活價值、經濟的生活價值を内含すると思ふ。

教育的價值としては、

- 一、身體的活動の増進（力の陶冶）——活動の興味、運動愛の精神陶冶
- 二、身體各部の均齊發育
- 三、身體の美的鍛鍊と感情陶冶

## 裁縫科

裁縫科は美の觀賞と裁ち方、積り方、縫ひ方、繕ひ方の再創作であること、即ち裁つたり、積つたり、縫つたり、繕つたりする再體驗であることによつて、藝術的の價値を體現する教科であると思ふ。

第二には勤勉、節約、勞作の實踐と、利用厚生、材料知見の經濟的認識は、經濟的價値乃至實用的生活價値を體現するものである。

小學校教科としての裁縫科は、

- 一、材料や創作品によつての美の觀賞と、裁ち方、積り方、縫ひ方、繕ひ方の認識と力の陶冶價値を有すること
- 二、經濟的知見の認識と勤儉勞作の實踐の陶冶價値を有することである

## 物語科

物語科は生活關聯に於ける道德的生活への生活了解の陶冶價値を有するのである。

而してそれは、生活關聯に於ける一方向の生活を生活として陶冶せんとする目的を有するものであつて、主として道德的生活への過程の陶冶としての道德的價値を内含して居るのである。

即ち私の課程案によれば物語科は尋三に至つて修身科へと接近し、近接したる修身科は尋四に至つて獨立して居ることなどは、生活關聯に於ける道德的價値を體現して居ることである。

そして生活關聯に於ける物語科は、副貳的には藝術的な直觀によつて、自己を客觀化して行く藝術的な生活價値を内含するものである。

其故に小學校に於ては主として低學年の教育に於て生活關聯に於ける道德的生活を陶冶せんとする目的と、藝術的方面の生活(假象感情の世界)を陶冶せんとする目的に於て課せられるものであつて、比較的に準備的基礎的要求からの教科たる、所謂準備的、綜合的教科と見られるが、それは未分化生活の指導に於ける未分科であることに

特質を有する教科である。

而して準備的基礎的であるといふのは、將來比較的獨立の教科といふべき獨立教科に發展する分科を内含するとの意味であらうし、総合的であるといふのは、比較に生活の未だ分化しない時代の生活關聯に即する総合的未分化的であることを意味して居るのであらうと思ふのである。

### 遊 戲 科

遊戯科は未分化生活に於ける未分化的総合的價值を有する教科である。一體遊戯がそれ自身意識的に抱懷したる目的であり、目的に即する活動であり、全一的渾一的な生活自體である。

其の未分化的な分科以前の全體生活は、未分化未發達統一の生活實現であつて、統一生活價值を體現すると見ても差支へない。

それは沒價值的な生活であるといふ人もあらうが、それは見方の相違、分量的相違

であつて、かゝる未分化の生活を助成して、兒童の生活の必然を當然にまで發達せしめんとする意思事實の生活指導であり、其の生活指導の教科に未分化統一生活の價值を豫想するものである。——自然の理想化、生活の助成に於ける教化科目の内容する本質價值を考察しつゝ居るものである。

未分化の生活の必然が藝術的な遊びと數量的な遊びと、體育的な遊びとを希求し要求するものである。その必要の生活が當然の生活まで、開展せられることは、當然への發展であつて、吾人の精神が活動によつて、價值を捉へることである。兒童生活に於ける感情意思の満足であり、物質を條件とする内的な直覺であるから、價值的であるといつて置いても差支へはないと思ふものである。して見れば遊戯科は藝術的、數量的、體育的な體驗價值を合一的に體現する教科であるといひ得ると思ふ。

遊戯科は小學校教科に於ける低學年教育教科の一科であつて、小學校に於ける教育價值としては、讀方、綴方、書方、音楽、劇、自然觀察、圖畫、手工、算術、遊戯の未分化生活の陶冶であることである。



## 生活科

生活科は、そのものが物語科の如き、未分化生活の指導教科として生れた総合的な教科である。それ故に生活關聯に於ける一方面の指導の要求によつて、定められた教科であるから基礎的準備的といはれ得る處の觀があるが止むを得ない。

生活分化關聯に於ける（心意構造發達に即して）地理、國史、理科に分科せらるべき未分化生活指導教科である。そして科學的な衝動に即する生活に即する教科であるから、科學的な生活價値を體現するところに教科としての價値を有するのである。

科學的な生活價値を體現することは、目的とするところ兒童の科學心の陶冶にあり科學心の陶冶は科學的興味の教化にあるのである。

科學心の陶冶と關聯的に藝術的陶冶の或る方面と道德的の或方面と、自然的な宗教的感情の陶冶とに貢獻するものである。

藝術的な陶冶と道德的陶冶と宗教的陶冶に貢獻することは、藝術的生活價値と、道

徳的生活價値と、宗教的生活價値とを關聯的に内容することを物語るものである。

## 作業科

作業科も手工圖畫を内容する未分科であり、藝術的な生活を指導する藝術的生活價値を體現する教科である。

直觀と表現とによつて、美的陶冶がなされる。即ち觀賞力の養成と創作能の養成とによる美の了解である。そしてそれが美としての綜合統一せられた全體生活の實現となり、美の價値を内含することである。

副貳的には勤儉勞作の經濟生活價値と道德實踐の道德的生活價値とを關聯的に内含して居る教科である。

## 第八章 教材の合科と分科の統一

本章には學習材料の提出乃至教材の統合の方法としての合科と分科との統一について述べて、再び教材の組織内容を明かにしようと思ふのである。

最近教育方法として合科學習、合科の反面に分科學習なることを述べて居る人々がある。即ち言ふ所は、兩主義共に兒童の心意發達構造に即すべき方法として述べて居るのである。然かもそれは、學習の指導方法としての意見方法であることである。

即ち合科主義は教材を生活その者として、合一的、全一的に學習生活せしめるものであり、分科主義は、各學科目に制限して、各時間に排列して教材を學習せしめる方法である。

而して今日、日本に於て實施せられて居る合科學習といふのは、教材そのものを合科として未分科の形式内容に統合して、即ち概念化されない具體一元のものとして與へんとするものであつて、生活内容の取り方を合科的になしたる教材の統合に基くところの學習をいふのではなくて、更に其れと同時に學習者が自ら自力的に生活の材料を全一的、合科的に選定し、然かも其の生活方法も自律的に自發的に作造して、心身

全體の作用たる具體生活の實現により、自我の統一發展をなさしめる事を、即ち學習と結合して考へて居るものである。其故に合科學習といふのである。

私は教材組織については、兒童心意の構造組織に即すべきものであると、即ち未分科の形から分科の形式と内容を以て統合提出せられねばならぬと思ふ。其の發達過程について乃至は其の基礎に立つ統一案を具體的に述べる者である。

合科主義と學習と結合せしめて、それが學習者がなす本能充足の意志的動作と、教師のなす環境との融合相即と、教師の指導に即するならば、學習は一方に偏することがないといふが、合科學習の本質に徹底するとすればそれは、必ず氣隨氣儘な學習活動となり、偏しないでは居らないと思ふ。私はかく思ふ。たとへ説明が如何になされたところで、それが決して國家要求の課程の内容に即することは出来ないものであることは確實である。

私は教科の分化と統一とを考へ、其の原理として主觀（心意構造）と、客觀（國家社會文化）の合一見地に立つ以上、日本の合科學習には賛成を表し兼ねる者である。そ

してそれと同時に、日本の現在法令に規定せられてある様な、未分化の生活期に於ての分科に過ぎた統一にも賛成し兼ねる者である。

即ち家庭の生活に連絡し、児童心意の未分化に即し、全一的具體の實在に合致する合科的方法から、児童心意の分化に即し文化の内容たる多元關聯たる分科の統合へと統一開展する提出でなければならぬと信ずるからである。

私は彼の獨逸法令の示す如き合科教授即ち郷土的直觀教材を中心として、すべての教材を総合して教授する總合教授については勿論肯定して居るが、此處には教科課程と内容との統合に對する立場と、教化材提出の立場とを述べて居るのである。

尙私の統一案によれば、合科は未分化生活期の學習材料の統一であるが、其の未分化生活に對する幾つかの生活相を認めて居ることである。是れ時代の生活相に即する教材の統一であり、教化材提出の方法相でもあることである。(統一案を此處には省略す)

## 第九章 生活豫定の時間割

### 第一節 時間割の意味

時間割のことは教育學上では、日課表といはれた。そして教科課程を各日に配當したるものをいふのである。私は教科課程を児童心意構造の發展と陶冶理想の實現との交響するところに理想を置いて統一案をたてたのである。そこで教科課程を各日時に配當することに問題は起らないやうにも考へられるが、そうではなくて、教育が生活指導である以上、よりよく生活せしめんとする點と、具體的な生活自體との交渉の上に教科課程を各日時に配當することについて、種々なる問題がある。先づ時間割それ自體の意味を明かにして、それに伴ふ種々なる問題について述べ、實際研究についても明かにして見たいと思ふのである。

一體小學校に於ける時間割は、人生々活に於ける豫定であることは言ふまでもない

明かなことである。即ち個人の生活に於ける豫定であるといふのである。然し個人生活のそれに於ては、生活の豫定を持たない人、或は豫定を立てない場合もあるが、又それでもすむが、それが多數の人が、協同的に生活を営むことゝなると、そこには必ず一定の時間豫定を必要とすることは、協同生活をなすものゝ直接経験して居る自明の事實であると思ふ。殊にそれがよりよき生活を爲す、よりよき生活を爲さしめる生活乃至生活の指導から見れば必要なものであると思ふ。

一體價值的な生活——價值ある経験の創造——體驗的生活に於ては、必ず時間割といふべき其の様式が生れて來るに相違ない。本質に於て、價值實現といふことが合目的の意味組織であり、體驗の境地であつて、理想性を内在する生命の活動であるから生活に於ては、必然的に豫定、時間割を伴ふものであるに相違ない。

即ち其の生命活動が眞實である限り、指導意識によつて豫定を立て、或は豫定を超越して生活々動が行はれるものであるに相違ない。是れが生活の姿でもあり、人生の姿でもあるのである。

かくして人間の生命活動の存在する限り、必然的に時間割なるものが生れて來るのである。其の生活は超越的のものであるから、豫定を立てながら、豫定を超越して豫定の生活をなさんとするものである。

さて生活の本質に於ては、合理性と非合理性とを内容とする生命の躍進であつて、合理的法則の發見と非合理的法則の體認とを生命、生活の本質とするものであるから其の生活、自然の理性化の事實としての生活——價值経験の創造としての生活の中には、自然性即個人性現實性なるものが、内在して居ると考へられる。

現實性なることは、成長發展と繼續的變化を内容とする自體の流動たることを意味するし個人性なることは個別獨自なること、主觀的にして自發自展の活動であることを意味するものである。

要するに生活に於ける現實性個人性なるものは、個別と變化と躍進と成長とを意味するのである。個別と變化と、成長と躍進とは生活の非合理にして非合理を要求する非合理なることは、論理的、普遍的、絶對的の制限から脱して、具象的時間、非劃一

的時間、主觀的にして人格的時間と、自由創造の態度に於て定められる時間、即ちかゝる生活のための時間割であることを要求するに相違ない。

而して現實性自然性の方向からの要求のみによつたならば、直前に述べた様になるから、時間割は主觀的に個人々々が定めたり、感情的直觀的に時々定めたり、或は其の規制を受けずして自己活動的な創造的な躍進の姿を要求するに相違ない。

然し吾々は全體としての認識可能の姿を見つめる。理想性と現實性とは、一元的適合連続であつて、存在即價值である。——かゝる生命事實、生活に出發して、生活を生活させることによつて文化生産物の意味と價值とを兒童の内に生かさんとする指導が陶冶の作用であるとする。

即ち生活を生活せしめることによつて、生活の發展と充實と深化とを目的とする。かく生命、生活の本質的意味にたちかへり、生活指導の豫定として見るならば、更に其處にいろいろな時間割としての意味が生れて來て、時間割制定の根據や原則が與へられて來ることである。

第一に時間割は必要であるといふことである。時間割はいらないといふ不必要論や時間割はどうでもよいとか、時間割といふものは重視しないとか言ふ處の非尊重論等に對しては賛成し兼ねる者である。

何れもの論が其の本質的意味を忘れたものであり、價值ある經驗の創造を無視し、生活の第一義を忘れたものであり、誤られたる生命信順であり、誤られたる自由を享樂し讚美する論者であると思ふ。

第二には必要ではあるが、絶對的劃一學な内容規定のものではないといふことである。即ち時間割を以て、絶對權威を持つものとし、時間割のための生活を要求する立看板とするものであつてはならぬといふのである。

要するに生命活動、生命欲求を無視する規制であつてはならぬといふことである。即ち文部省制定の教科過程案が要求して居る毎週教授時數を劃一的に、配當して行く時間的分配の如き、生活指導の機械的規制であつてはならぬ。

かゝる生活の外的規整は生活を形式化するものであり、生命の眞の姿を指導して行く

豫定とはならないと思ふ。一體今日の小學校の教育改造にはかなり此の様な形式化があると思ふ。即ち生活指導といへば具體生活の指導ではなくて、それが形式的方面の指導をすることを以て、それであると解したり、遊戯化の數的生活指導であるとすれば、形式的な數字を遊戯化する生活方法の指導が、即ち遊戯化の指導であると解したりする等の様な形式化は禁物である。——勿論一面には生活指導の方法として必要ではあるが、それで押通すことは誤りであるといふのである。

價值經驗の創造は、文化を傳達することによつて、文化を創造する事であるべきに教科の劃一配分は、概ね既成文化財の傳達としての講述に偏し易いものであることは實際家の誰しもが陥ることである。

第三には要するに時間割は、兒童の生活組織の躍進に即すべきで、生活の分化發展に相即して、豫定生活の時間的様式に變更を要すべきである。

即ち内容的には時間割は教師と兒童とによつて、組織せられて行くものである。たゞそれが低學年に於ては、教師の豫定意識が強く働き、上學年に至るに従つて、兒童

の側の中に自己の豫定であることの意識が、多く働く様にすべきであると思ふ。

それであるから、低學年でも、中學年でも、上學年でも何れも教師と兒童との全一プランで構成活動と指導との合目的な組織である。或る新らしい學校で、所謂時間割を設けたり、又廢して見たりするならば、それは其の合目的な全一組織への惱みの過程であると見るべき現實事實である。

## 第二節 時間割作製の原理

私は教科課程の意味を、生活指導財であり、陶冶財のそれであることを述べ、それは個性價值體の生活の事實と、客觀的な陶冶理想との相關交響の上に定めらるべきものとし、其の原理の上に私の統一案を述べたのである。

かく生活の事實と陶冶理想との上に、立てられた統一案の上に、生活の豫定たる時間割が立てられべきことは當然のことである。

若し其の統一課程なるものが、從來の如き陶冶理想の上に割出され、社會的要求

に強く基礎を置くものであるならば、それには賛成し兼ねるのである。即ちそれは劃一の生活と既成文化の傳達の形式を不文の中に表明して居るからである。

然らば時間割作製の原理を何に求むべきであるか。曰く、それは時間割なるものが教科課程に基礎を置く以上は、教科課程統一の原理と同様に、生活の事實（主觀的原理）と陶冶の方向（客觀的原理）との交響合一の上に求めねばならぬことも自明のことであると思ふのである。以下此の二原理の示す條件について列擧して見ようと思ふ。

### 主觀的條件

- 一、兒童の生活の發展を考へて行かねばならぬ。即ち未分化の生活から關聯分化の生活を指導する豫定時間の制定であらねばならぬ。  
生活指導の各相が具體全一の相から關聯分化の相へと展開する相に基づくことは科目の分科と内容の配分が、次第に分科的とならねばならぬことである。
- 二、一つの具體生活を中心として生活して行く時間（生活に於ける各々の生活相）の

移行展開は發達の程度に合一すべきものである。それは從來研究せられて居る教授時間、休憩時間との配分についての原則についてである。

生活相に於ける内容には、個別的活動方面と、創造的活動方面とを多分に含ましめることである。

- 三、教科の時間的配分は、疲労にもとづく勞力分配の原則に準じて行かねばならぬ。即ち疲労の高低と、精神活力の移行との關係を考へることである。即ち一週に於ける各日の配當、一日に於ける教科別配當についてである。

### 客觀的條件

- 一、陶冶意識乃至指導意識の現はれであることを要する。即ち單なる機械的なる規整であつたりしてはならぬ。即ち指導意識に基づく規整であらねばならぬ。

兒童自身の思ひ付きによつて、立てられることは、兒童の生活指導——價值經驗の創造は十分に行はれないに相違ない。

二、時間割は教科課程案の区容組織に合一すべきものである。即ち課程案の内容組織それ自身が既成の文化價値の傳達を目的としてのみ立てられたものでなくて、生活創造を豫定して、相即的に定められた發達生活の豫想案であり、生活案であるからである。

三、時間割は躍進する姿——生活の豫定案であるから多少變更せられることがあるは止むを得ない事實であるが、其の變更をなす場合には、生活の全野にわたつて、統一を要求することである。

### 第三節 時間割作製の實際

時間割作製の實際についての例として、體驗學校で實施して見た、生活豫定の其の實際を述べて見ようと思ふのである。體驗學校に於て實施せられる生活豫定時間割は從來の案よりは、より多く時間割の意味に相即し制定の原理に合一して居るものと思ふのである。

先づ其の生活豫定の配分の中に含まれる兒童の生活相の斷面の形式について見ることは、學習生活相を配分する上に必要なことと信するのである。

#### 學習生活相の形態

##### 一、個人學習——個性的學習生活

個人的自發的に自己活動によつて、個性的に生活を體驗して行くものであつて、自學自習も之れであり、獨自的な遊戯、獨自的な作業もそれである。そして自由時間と自習時間と課目時間と何れにも行はれる形態である。

##### 二、相互學習——共同的學習生活

社會的個人として共同的に遊戯作業によつて生活を體驗するものであつて、相互が研究、學習の中心となつて同一生活をなして行く學習である。そして會合の時間と、自習時間と自由時間と、課目時間と何れにも行はれる形態である。

##### 三、聽講學習——社會社學習



之れは教師の指導によつて一定の學習をするか、兒童の説明によるか、何れにせよ、社會的個人として認識的學習、體驗的學習としての學習生活をなす場合には行はれる形態である。

## 第十章 教科課程と教科書

### 第一節 教科書の意義

教科書といふことは教科課程に即したところの教科用書のことである。英語のテキストブックに當る語義を有して居るものであつて、教化財を學習者の學習に便ならしめるために順序系統立てて、選擇し排列し、記述したものである。それであるから本質的には筋書のもの、主文的のものであることである。

従つて學習せしむべき財が系統的に基準的に記載されてあるのである。之れを内容

的に見れば教化財は、價值經驗の構成たる生活指導の資料であるから、價值の六相たる科學、道德、藝術、宗教、政治、經濟に基礎を置くものであり、道德的の生活（修身、自治會）、科學的の生活（地理、國史、理科、算術、家事等）藝術的の生活（國語、外國語、圖畫、唱歌、手工、裁縫）、宗教的の生活（他教科に含まれる）、政治的の生活（他教科に含まれる）、經濟的の生活（實業科其他の教科に含まれる）を指導する文化財の選擇記載されたものである。

價值は被教育者の心意構造に置かれて價值意識として考へられるものである。價值意識の自覺發展たる陶冶財は精神構造に即すべきものであるから、直前に述べたる價值の六相を指導する資料が教科書に載せられるものである。

### 第二節 國定教科書の意義

國定教科書は形式に表はされたるが如くに國定である。國定とは國家的意志の顯現によつて造られるといふことを意味して居る。

國家的意志の現出して居るとは如何なる事か。即ち教育の事實は國民的文化の體驗であり、國民意識の陶冶である。國民を指導するものは、國々の文化であり、國民は展開して來た文化たる學問、政治、經濟、藝術、道德、宗教にすべての文化體系を體驗して行くものである。かくして國民的文化の體驗は人間の陶冶であり、國民創造、人間創造である。

國家文化の創造發展は生の發展であり、精神的血脈の存續發展であり、それが人類世界の文化への貢獻である。要するに國民的文化の裡に發展する國家文化こそ人類世界の文化によく貢獻するものである。

而して國民的文化の體驗は、小學校教育に於ては、小國民たる國家文化の感受體をして自覺せしめんとする指導である。即ち國民的文化——科學、道德、藝術、宗教、政治、經濟を意識的に體驗せしめることであり、國民的生活様式の生活指導である。

かゝる國民的生活様式の生活指導に於ける教化財を同心一體たる國家が國家の意志によつて國民的文化の中から選擇排列して提供するは、合理的なことでもあり、又當

然のことでもある。(私の立場については更に拙著「日本文化教育學」第十章國民意識の陶冶を参照せられたい。)

かくして現出した國定教科書は、國民的文化の體驗、國民陶冶の點から見て着眼と方法と組織の宜しきを得ば、理想的のものであるべきが當然である。其故に國定教科書は國家が國民に教育を強制するが如くに、國定教科書の使用についても亦、兒童と教師に強制するのである。即ち教師に對しては、教育の方向を示す教授材料案であるし、兒童に對しては、筆記備忘録に代用せられるものである。

以上私は國定教科書なるものについて、本質的意義を述べたつもりであるが、其の論旨とするところは、國民意識の陶冶の意味を充實したるものであることである。次に本質的意味に於ける私の教科書觀について一括附言して置くこととする。

一、國定教科書は生活指導の内容的方面の系統化、組織化には、便利の點が非常に多いことである。

二、國定教科書は生活指導の形式的方面が精密に研究せられてある。例へば文字提出

とか、能力順進の程度、難易繁簡排列の宜敷こと等に於てである。

- 三、國定教科書は供給を完全にす。即ち代價の低廉と普及を迅速にすることである。
- 四、そのかはり國定教科書は、教科書の本質に基づく内容形式改善を妨げることがあるし、地方的事情に比較的合致しないで、普遍的に傾き易いことである。

### 第三節 生活指導と國定教科書

國定教科書は直前に述べたる様な、本質的の意義を有するものであるが、多くの教育者が考へて居り、實際にやつて居る様な教科書が唯一の生活指導材料であると思ふ。是れ系統化の骨組乃至生活指導の形式的方面を指示して居るものであるに、生活指導の全部に教科書を伴はしめて、如何なる場合も教科書が、兒童の學習生活の沈潜場所として、指導せられる事は、生活を貧弱ならしめ易い現象を伴ふ。即ち教科書の頁數や題目の數によつて決定したりすることは、生科の全野にわたつて深味を與へ、精彩を與へることとはならない。無味乾燥狹隘な生活を強

ふることゝなることは事實である。

而して兒童の全生活を深化擴充せしめる生活指導に於ては、以上の如き方向を示す國定教科書のみによつては、望まれない。國定教科書を所謂活用して行かねばならぬ教科書活用の第一歩は、教科書に示された教材の深化である。教科書の要求を生活の要求と交響せしめる。そして題材の生命と兒童の生命とを合致せしめる様にす教材の生命化である。

又國定教科書を活用することは、環境を豊富にすることから始まる。即ち環境を豊富にすることから國定教科書の内容が生きて來るのである。環境のことについては、次の章に改めて述べるつもりであるが、生活指導の諸相の章にも述べてある。

環境から衝動が、衝動から問題が生れる。問題は問題を參考とし、問題の解決をなし、次の問題の構成をなすものである。かくて次第に生命、活動は躍進して行く、それが生命の姿であり、生活である。

教科書に此の衝動の一つともなり、問題の參考解決構成の一つでもあり、生活の方

向をも示すものであるから、要するに生活の方向を示すものであつて、然もそれが生活指導の實際に於ては、環境の一つでもある。

生活指導の方向を示すものとして乃至指導の實際に合一する環境としての教科書の活用について述べて行く。其の第一は教材の深化であり、第二は環境の創造である。兒童は是等の直接の経験や間接の経験によつて、教科書の題材と交響し、接觸する事となり、統一せられた生活が進展して行くことゝなるものである。以下それが内容を掲げん。

### 教材材の深化

- 一、見學、參觀
- 二、學習劇
- 三、具體化の研究、有機的關係化の研究
- 四、學藝會、展覽會、運動會等の會合

- 五、野外研究觀察
- 六、街頭觀察研究

### 環境創造（狹義の意味に於ての）

- 一、讀物、辭書の提供、研究室學習
- 二、生活指導案は眞の教育の姿、生活指導に即すべきもので、教師一人の生命活動の豫定表現ではないことである。教師兒童の生命の躍進の交響であることを忘れてはならぬ。
- 三、學校博物館、實驗實測室、學校園、運動場、體育館、生物飼育場、工作室、音樂室、生活室

## 第十一章 環境組織

## 第一節 環境組織の意義

環境の一般的意味や、環境の種相の一般、生活指導に於ける地位などを先づ述べて見たいと思ふ。一體教育事實は環境を背景としての作爲であり、意志事實である。即ち環境は自然的に心身を發達せしめる條件である。

是れ人間を不斷に刺戟して居るからである。此の環境の中に人間が置かれる時、然も完全なる教育的な環境の中に——教育的に組織せられたる環境の中に置かれる時に理想的な方法が生まれ、理想的な活動が出来るのである。かく教育的に組織せられた環境は理想的な環境であり、所謂價值的な環境である。

環境は一體價值的な刺戟を與へる性質を具有して居る。其の刺戟に感受し乃至は、其の刺戟の意味體驗をなすは、體驗者の具有する性質である。而してかゝる環境の刺戟は、有意的には勿論無意的にも行はれるものであることは、吾人が兒童教育の實際に於て實驗しつゝあるところである。

例へば尋常二年生の學習室に、メートル度量衡器を備付けて置いたことがある。(それは算術自習室を尋常の學習室に兼用した時のことである。)處が彼等は價値存在に刺戟せられ、其の見方使用法を質問し、遊びの生活の中に、是れが使用を體驗してしまつたことがある。

吾人は時計の見方を改めて殊更に教室、學習室に持參して教授するなどの愚なることを思ふものである。私は此處に深い意義を認めるものである。

殊に私は個性の發揮、個性活動の試練は、體驗者と環境との交響に於てであつて、關聯的な立場からして欲求の充足となり、意志活動の實現となるものであると思ふ。かくて體驗の環境創造は、指導者の環境創造であり、指導者の創造は體驗者の創造である。其處に體驗的生活が行はれるのである。是れ現實を理想化する連續的な理想の實現事實である。

然らば何故に環境の組織は必要なりや。是れ他なし、自然に存する環境は所謂、自然的なものであつて、偶然には兒童の生活の價値活動を助成する様なものもあるに相

違ないが、中には反對の現象を現出するものも存することは事實である。

かくして生活する兒童には意味ある環境即ち理想的な環境——道德、政治、科學、宗教、教育等の理想環境を提供すべく、一面たる價值生活の反對にして不全なるものは改造すべく組織することを必要とするものである。

私は此處に一言附して置く必要を生じて來た。即ち教育と環境を一元的に見るか、二元的に見るかの問題である。即ち教育上に於て、教化財を感受せしめるは、感受者たる兒童から見れば、是れ理想的なる環境を作造してもらふことである。即ち教育事實は、理想的環境を提供するものであるし、それは價值構成の素材及び構成の方法として環境を組織してやることであると見るは一元觀である。

それに對して文化社會の事象は、個體の成長發達に好影響を與へ、又は惡影響を與ふるものであることは事實である。然るに教育といふ以上は個體の發達に及ぼす惡影響といふことは考へられない。是れ目的批判に立脚する當然の刺戟影響であるからである。かく考へる時は、教育と環境とは異なる立場、即ち二元的の考方となるのである。

る。

かくして何れの解釋をなすもさしたる教育的の支障はないし、又其れは誤りであるとも直ちに言ふことも出来ない。而して私は教育の事實を價值生活の創造と見るものであるから、此處に環境の組織は一元的に見る立場をとつて居る者であることを附言して置くのである。

## 第二節 環境の意義

前節に於て環境と生活指導との一般について述べたので、本節には環境の如何なるものなりやを見たいと思ふ。

普通に環境を解して、學習者の各自の周圍に在り、學習者に刺戟を與へる事物のことをいふのであるが、其の刺戟を感受し、其の刺戟に意味を與へる價值感受性は、學習者自身に體有するものであることは、明かなる事實である。

環境は其の本質に於ては、個別的のものであつて、個々の存在は同一なるものでは

ないことも明かなことである。客觀的存在としての素材たる或る特定の存在が實在としては同一の存在であるが、一度それが、各自の環境となるときは、其の意味に深淺廣狹の相違を生ずるから、環境としての實在は動的變化的のものであることである。

環境の影響は有意的と無意味的に行はれるから實に多種多様である。家庭あり、學校あり、社會あり、自然界があるが、普通は自然的環境と社會的環境とに分けて考へられる。此の社會的環境を構成する要素が、人と物と社會との三相である。此の三相も組織上考察する時、社會的環境を考察することによつて、人と自然的環境を其の中に内含したる文化社會環境として考へられる。

文化社會環境は文化の諸相に關して、科學的、道德的、藝術的、宗教的、經濟的、及び政治的の六相として考へさせられるものである。かゝる六相は文化社會生活として關聯的立場にあるものである。

### 第三節 環境の内容

私は直前に於て教育は又見方によつては價值構成の素材及び構成の方法として環境を組織してやることであるとの一元觀をとつたのであるが、かゝる立場から環境の内容について論を進めて見ることにする。

一體環境を組織することは環境の施設經營をすることであり、環境を計劃實施することでもあるから、環境組織の内容は實に廣汎なるものである。即ち兒童相互、教師學習用具、教科書、校地校舎、學校施設、家庭の人と家庭の組織、文化社會、文化國家などが考へられる。

私は環境組織の内容を以上の如く廣汎に見たが、其の組織する内容の相互は、本質的な立場を有して居るものであつて、所謂環境としての附隨的な要素とは見て居ないことを誤らない様にしてもらひたい。

さて組織せらるべき環境は如何にせらるべきか、先づ環境としての學校について方

向を示すことに止めて、環境としての社會、國家とか家庭とかについては、他の機會に述べるつもりである。

# 現代學習指導の新課程 (終)

昭和六年六月二十日初版印刷  
昭和六年六月廿五日初版發行

現代學習指導の新課程 (奥附)

定價金貳圓四拾錢



著者 山崎博  
東京市京橋區入舟町五丁目三番地  
發行者 吉田幸太郎  
東京市芝區神明町三十番地  
印刷者 山本五平

發行所

東京市京橋區入舟町五番  
振替東京四九五七五番

教育實際社

發賣所

東京市京橋區入舟町五番  
振替東京一八五一三番

明治圖書株式會社

大賣捌所

東京 林六合館 大阪 柳原書店 名古屋 川瀨書店  
久留米 菊竹金文堂 佐賀 大坪惇信堂



[書育教の社際實]

教育實際社發行圖書

<p>教育研究會代表者 友納友次郎先生著</p>	<p>學校經營の具體化 校長事務の系統的研究</p>	<p>四六判洋裝全一冊 定價金十三圓四錢</p>
<p>文學士 大澤作治先生 共著 福田正造先生</p>	<p>學校訓育社會教育 新時代の訓示講話大系</p>	<p>菊判洋裝全一冊 定價金四圓五十四錢</p>
<p>文學士 山根眞住先生 共著 西村貫一先生 前奈川縣女子師範學校 前教諭 山崎博先生著</p>	<p>最新心理學を基とせる 個人差の教育指導</p>	<p>四六判洋裝全一冊 定價金三圓九十二錢</p>
<p>文學士 三木英太郎先生著</p>	<p>學習と生活指導 參觀と批評の要諦</p>	<p>四六判洋裝全一冊 定價金二圓九十二錢</p>
<p>德島縣師範學校前訓導 長 安部清見先生著</p>	<p>情意教育の原理と實際</p>	<p>四六判洋裝全一冊 定價金二圓五十二錢</p>
<p>東京女子高等師範學校 前囑託 白土志佐先生監修</p>	<p>體操遊戯競技 最近運動會の經營</p>	<p>四六判洋裝全一冊 定價金二圓九十錢</p>

[書育教の社際實]

青山師範學校訓導 天野文憑先生著 綴方教育の本質を見つめて 四六判洋装全一冊 送料金十二錢	宮崎縣師範學校訓導 吉田義則先生著 讀方意識の發展に基く綜合の讀方教育 四六判洋装全一冊 送料金十二錢	奈良縣 奈良縣師範學校教諭 小寺彦夫先生著 自己訂正による算術の學習組織 四六判洋装全一冊 送料金十二錢	熊本縣第一師範學校 櫻井小學校編纂 發展的學年教育の系統 四六判洋装全一冊 送料金十二錢	熊本縣第一師範學校 附屬小學校編纂 各科指導現象的學習法 四六判洋装全一冊 送料金十二錢	東京高等師範教授 阿部七三吉先生 青森縣師範學校教諭 西館彌輔先生 神奈川縣女子師範學校 前教諭 山崎博先生著 自己發展の學習を旨す手工科指導實論 四六判洋装全一冊 送料金十二錢	文學士 華岡銳藏先生 山口達郎先生 共著 新時代の郷土教育 四六判洋装全一冊 送料金十二錢	東京府豊島師範學校 加藤忠治先生著 教育の基としての成態心理學概論 四六判洋装全一冊 送料金十二錢
---	---	---	--	--	--	--	---

□呈進代無録目書圖育教□

[書育教の社際實]

東京府豊島師範學校 綴方研究部編纂 綴方指導の實際(尋二) 四六判洋装全一冊 送料金十二錢	東京府豊島師範附屬小學校 綴方研究部編纂 綴方指導の實際(尋三) 四六判洋装全一冊 送料金十二錢	東京府豊島師範附屬小學校 綴方研究部編纂 綴方指導の實際(尋四) 四六判洋装全一冊 送料金十二錢	東京府豊島師範附屬小學校 綴方研究部編纂 綴方指導の實際(尋五) 四六判洋装全一冊 送料金十二錢	東京府豊島師範附屬小學校 綴方研究部編纂 綴方指導の實際(尋六) 四六判洋装全一冊 送料金十二錢	東京文理科大學助教 武政太郎先生監修 遊戯化教育 四六判洋装全一冊 送料金十二錢	臺灣總督府文教局督學官 若槻道隆先生著 劍道指導の實際 四六判洋装全一冊 送料金十二錢	東京成溪學園 野瀬實顯先生 共著 最近歐米の文化と教育 四六判洋装全一冊 送料金十二錢	東京成溪學園 根岸豊先生 共著 小學校に於ける學藝會と展覽會の經營 四六判洋装全一冊 送料金十二錢
---	--	--	--	--	--	---	---	---

□呈進代無録目書圖育教□

[書育教の社際實]

<p>田中 穰先生著</p>	<p>家庭教育の革新 受持教師から保護者へ</p>	<p>四六判洋装全一冊 定價金一圓三十錢 送料金十二錢</p>
<p>神奈川縣 田島體験學校著</p>	<p>各科學習 作業化指導の様式</p>	<p>四六判洋装全一冊 定價金一圓八十錢 送料金十二錢</p>
<p>文學士 大澤作次先生著</p>	<p>小學校に於ける 新訓練の理論及實際</p>	<p>四六判洋装全一冊 定價金一圓九十錢 送料金十二錢</p>
<p>東京府源氏前小學校長 宮川直吉先生著</p>	<p>體験記錄 自覺者の歩んだ道</p>	<p>四六判洋装全一冊 定價金一圓二十錢 送料金十二錢</p>
<p>東京高等師範學校 教授兼主事 佐々木秀一先生著</p>	<p>現代教育の諸問題</p>	<p>菊判洋装全一冊 定價金四圓五十錢 送料金二十四錢</p>
<p>東京高等師範學校 教授兼主事 佐々木秀一先生著</p>	<p>道德教育の諸問題</p>	<p>菊判洋装全一冊 定價金三圓八十錢 送料金二十四錢</p>
<p>東洋大學教授 帝國小學校長 西山哲治先生著</p>	<p>現代教育の新潮と實際</p>	<p>四六判洋装全一冊 定價金一圓八十錢 送料金十二錢</p>
<p>徳島縣師範學校前訓導 徳島女子職業學校教諭 女部、平澤兩先生共著</p>	<p>時代の要求する 小學校作法教育案</p>	<p>四六判洋装全一冊 定價金一圓二十錢 送料金十二錢</p>

終

